



調査地全景合成写真(上が北西)

3.長岡京跡右京第968次(7ANRHK-8地区) 発掘調査報告

1. はじめに

今回の調査は平成21年度主要地方道大山崎大枝線道路改良事業にともなって、京都府建設交通部の依頼を受けて実施した。調査地は長岡京市調子2丁目に所在し、長岡京跡の条坊復原では長岡京右京九条三坊八町、八条大路推定地(新条坊)にあたる。周辺では、京都第二外環状道路関連の調査として、平成16年度に長岡京跡右京第825次調査^(注1)、平成17年度に長岡京跡右京第851・902次調査^(注3)、平成19年度に長岡京跡右京第926・928次調査^(注4)、平成20年度に長岡京跡右京第938・946次調査^(注6)が行われている。今回の調査地に隣接する右京第825次調査の10～12トレンチ、右京第946次調査のa2・c1地区では、小泉川の旧河道とみられる自然流路のほか、平安時代の溝・掘立柱建物などが検出されている。

今回の調査地は道路建設工事との兼ね合いで、先行して調査を行う東側半分を調子c2地区、西側半分をc3地区と呼称し、それぞれ、着手順にc2-1地区・c2-2地区、c3-1地区・c3-2地区・c3-3地区と枝番をつけて調査区名とした。現地調査は平成21年4月8日～11月27日まで行い、調査第2課調査第2係主任調査員松井忠春・森島康雄、調査員奈良康正が担当した。調査に要した経費は全額京都府建設交通部が負担した。なお、国土座標は日本測地系を使用している。



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 京都西南部・淀)

調査対象地は上下2段の耕作地にまたがっている。北西部から張り出す上段は標高約19.4～19.5m、下段は標高約19.0～19.1mを測り、上段の縁辺に用水路が通っている。本報告ではこの水路より北西の上段に位置するc2-1・c3-2・c3-3地区を北部調査区、水路より南東の下段に位置するc2-2・c3-1地区を南部調査区として報告する(第3図)。

2. 検出遺構

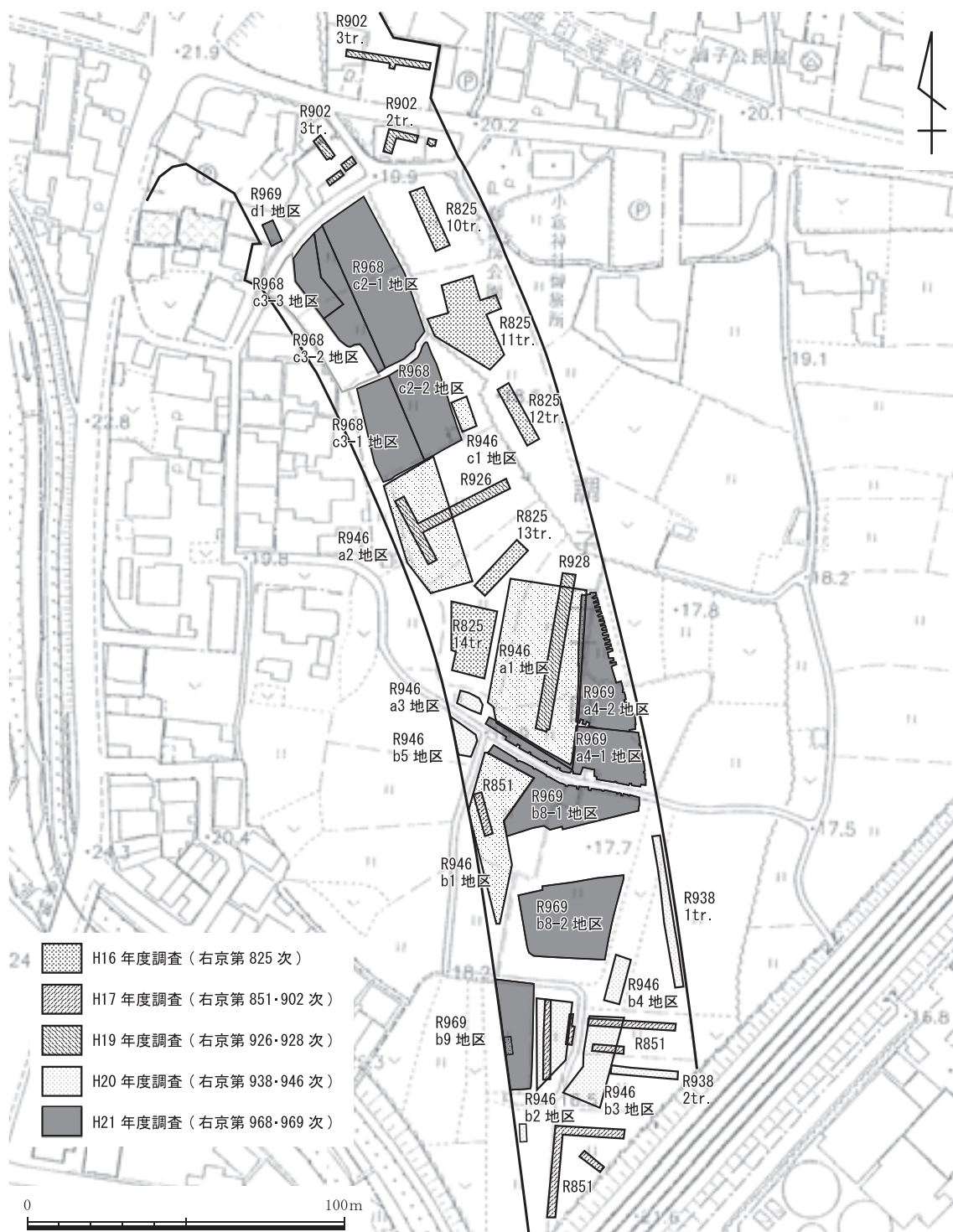
北部調査区では、2面の遺構面を検出し、南部調査区では1

面の遺構面を検出した。

1) 北部調査区第1遺構面の遺構

北部調査区はc2-1地区・c3-2地区・c3-3地区の3地区に分けて調査を行った。調査面積はそれぞれ、820㎡・300㎡・180㎡である。北部調査区では、近世の第1遺構面と古代・中世の第2遺構面を確認した。

層序は、厚さ約0.3m前後の表土層の下に、北半では明褐灰色砂礫(第4図2層)、南半ではに



第2図 調子地区調査区配置図 (S=1/2,000)

ぶい黄褐色粘質土(第4図7層)と明褐灰色礫混じり粘質土(同9層)、黄橙色粘質土(第5図5層)などが堆積している。これらの層厚は西部では0.1mであるが、東に行くに連れて厚くなり、東部では0.25mを測る。北半と南半の土層の違いは、調査前の畑の筆の違いを反映している。これらを除去した標高18.8~19.0mで第1遺構面の遺構群を検出した。

第1遺構面では、江戸時代の大溝、土坑などを検出した。

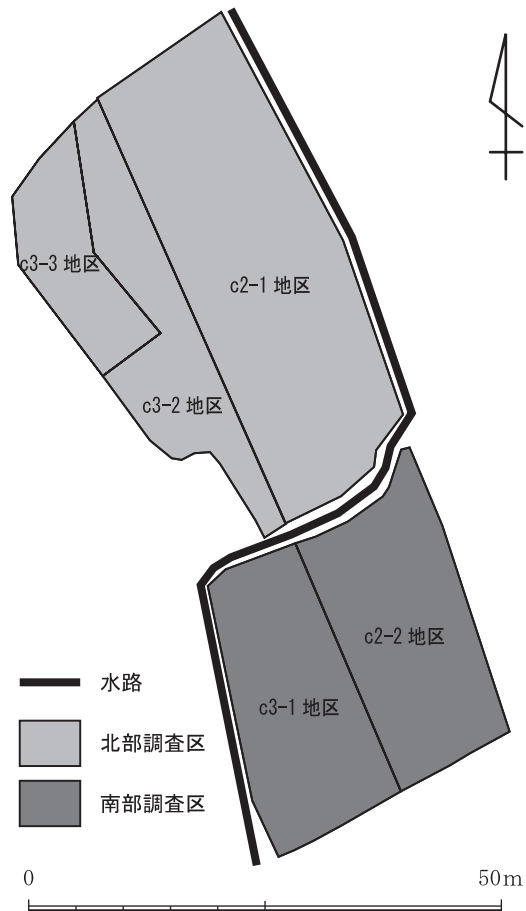
土坑 S K 23(第6・7図) c2-1地区北部で検出した浅い土坑である。最長辺12.7mを測る不整四辺形を呈する。深さは0.2mで、埋土は灰白色礫混じり粘質土のほぼ単一層であるが、南肩付近の底部にのみ褐色系の土がわずかに堆積している。

土坑 S K 28(第6・8図) c2-1地区中央部から南端にかけて検出した幅8m前後の土坑である。深さは約0.2mを測り、埋土は上層のぶい橙色礫混じり砂質土と下層の褐灰色細砂の2層に分かれる。

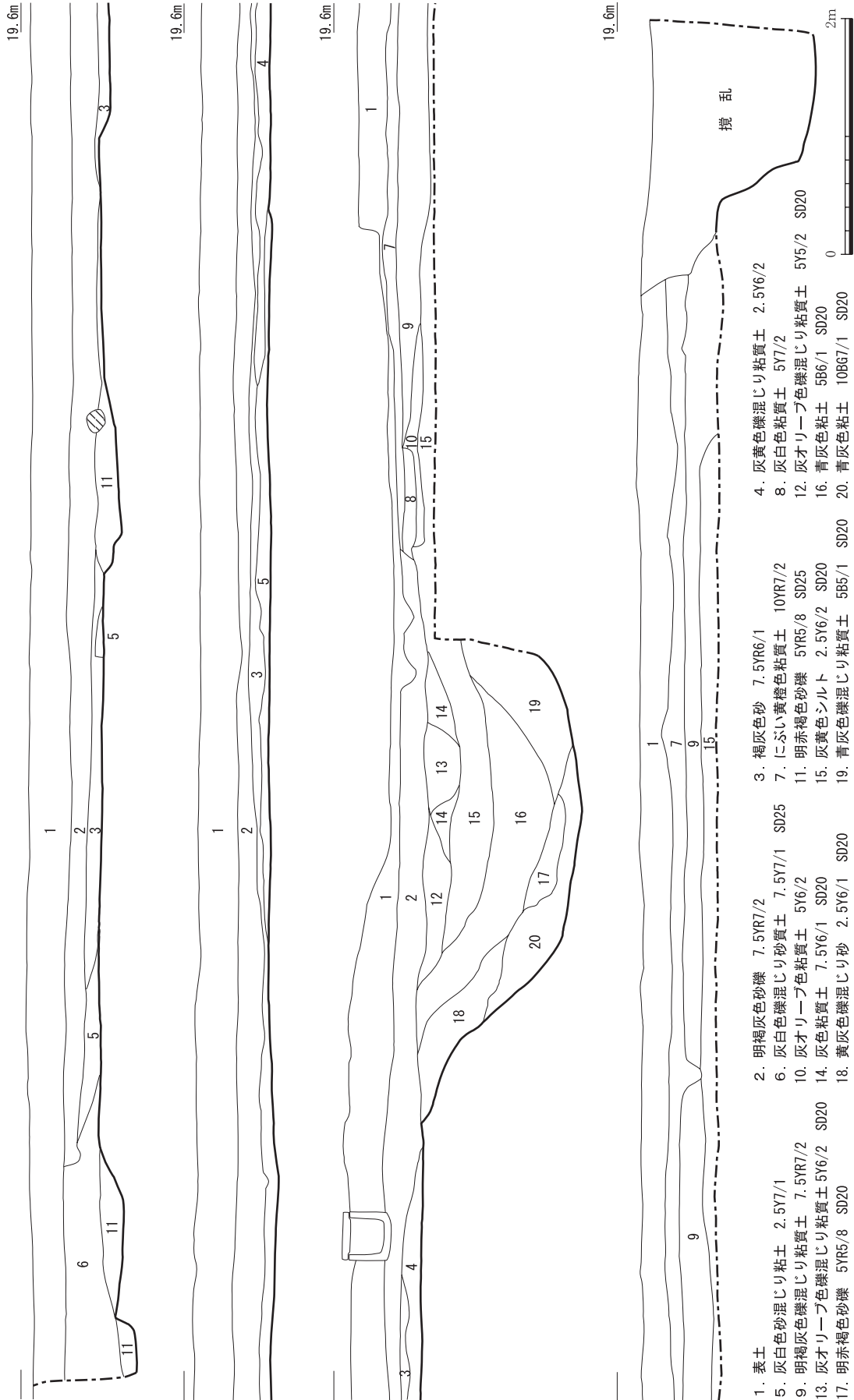
土坑 S K 22(第6図) c2-1地区西端の中央部から南部にかけて検出した土坑である。S K 28の西側にほぼ平行し、東肩はS K 28によって削られていることから、S K 28に先行することがわかる。深さ0.2mを測るが、南端部では0.05mと浅くなっている。埋土は明赤灰色細礫である。

溝 S D 20(第6・9図) c2-1地区東端部の南半で検出した溝である。溝の北端はc2-1地区中ほどで東に屈曲して調査区外に続き、南は南部調査区のc2-2地区に続く。断面形は浅い「V」字形を呈するが、南端部4~5mは浅い「U」字形を呈する。東肩は調査区外であるが、調査区東端では溝の深さが浅くなっていることから、幅6.5m程度と想定できる。深さは断面「V」字形の部分で0.8~1.3m、断面「U」字形の部分で0.45mを測る。埋土は、断面「V」字形の部分では中層の灰白色粘土(第9図I-I'断面3層、J-J'断面9層)を境に、上層では灰白色~灰黄色系のシルト、下層は青灰色~緑灰色系の粘土が卓越し、断面「U」字形の部分では、褐灰色~灰色系の粘質土(第5図12~16層)が卓越する。

溝 S D 25(第6・10図) c2-1地区東端部の北半で検出した溝である。南端はS D 20に切られている。幅5m前後で、深さは約0.5mを測る。埋土は砂礫が卓越し、流水による堆積層(第10図6・9層)が確認できる。



第3図 右京第968次調査地区割図 (S=1/800)



第4図 c2-1地区東壁断面図(S=1/50)

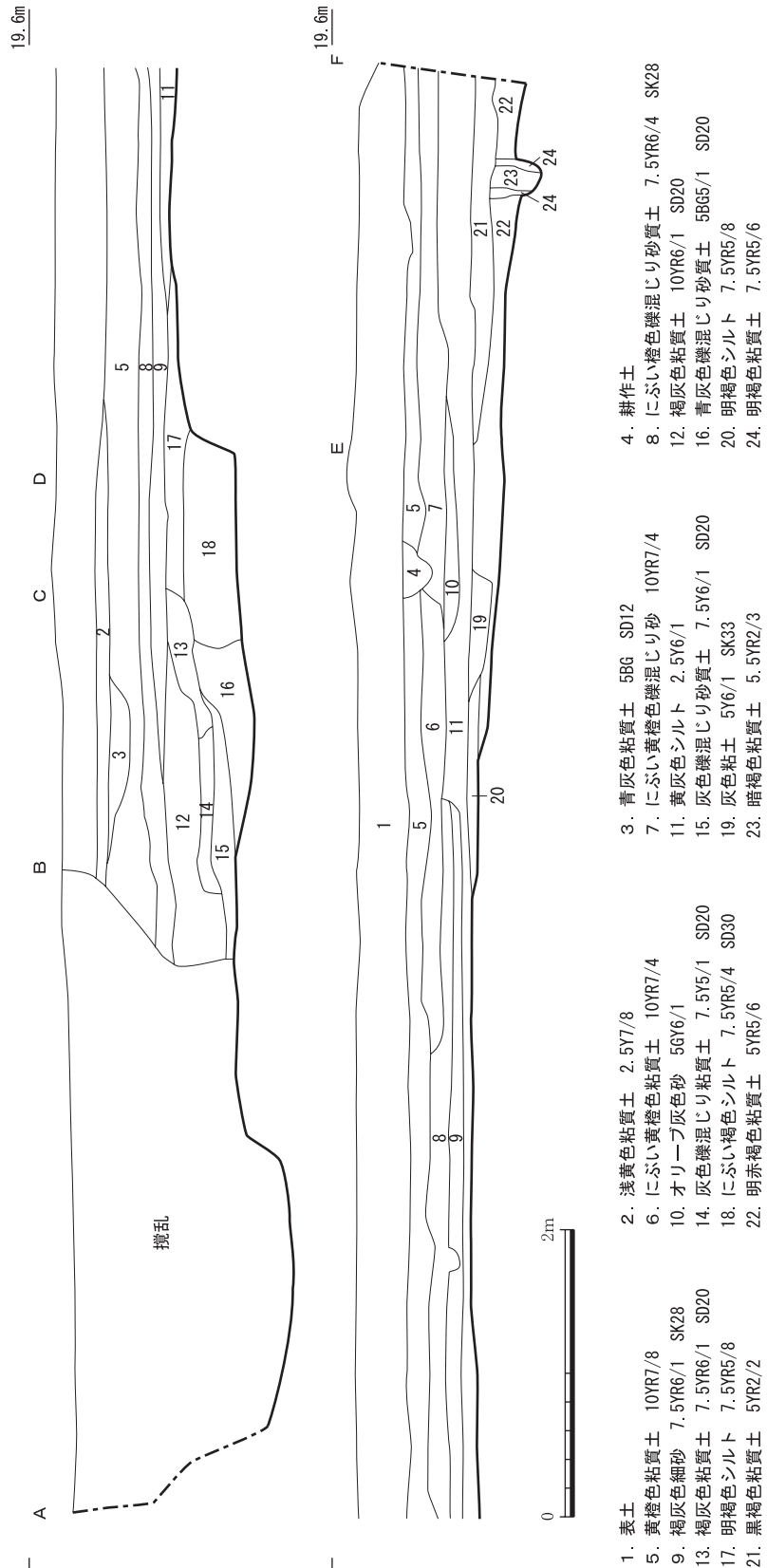
溝 S D24・29 (第6・11図) c2-1地区北部で検出した平行する溝である。上部を近代の溝に削平されている。幅0.5m前後、深さ0.15m前後を測る。埋土は灰色砂礫で S D24は下層にオリブ灰色シルトが薄く堆積する。

溝 S D26・27 (第6・11図) c2-1・c3-2・c3-3地区で検出した平行する溝である。幅0.5m前後、深さ0.05m前後を測る。埋土は黄灰色粘質土で、S D27は南寄りの下層に灰黄色粘質土が堆積する。

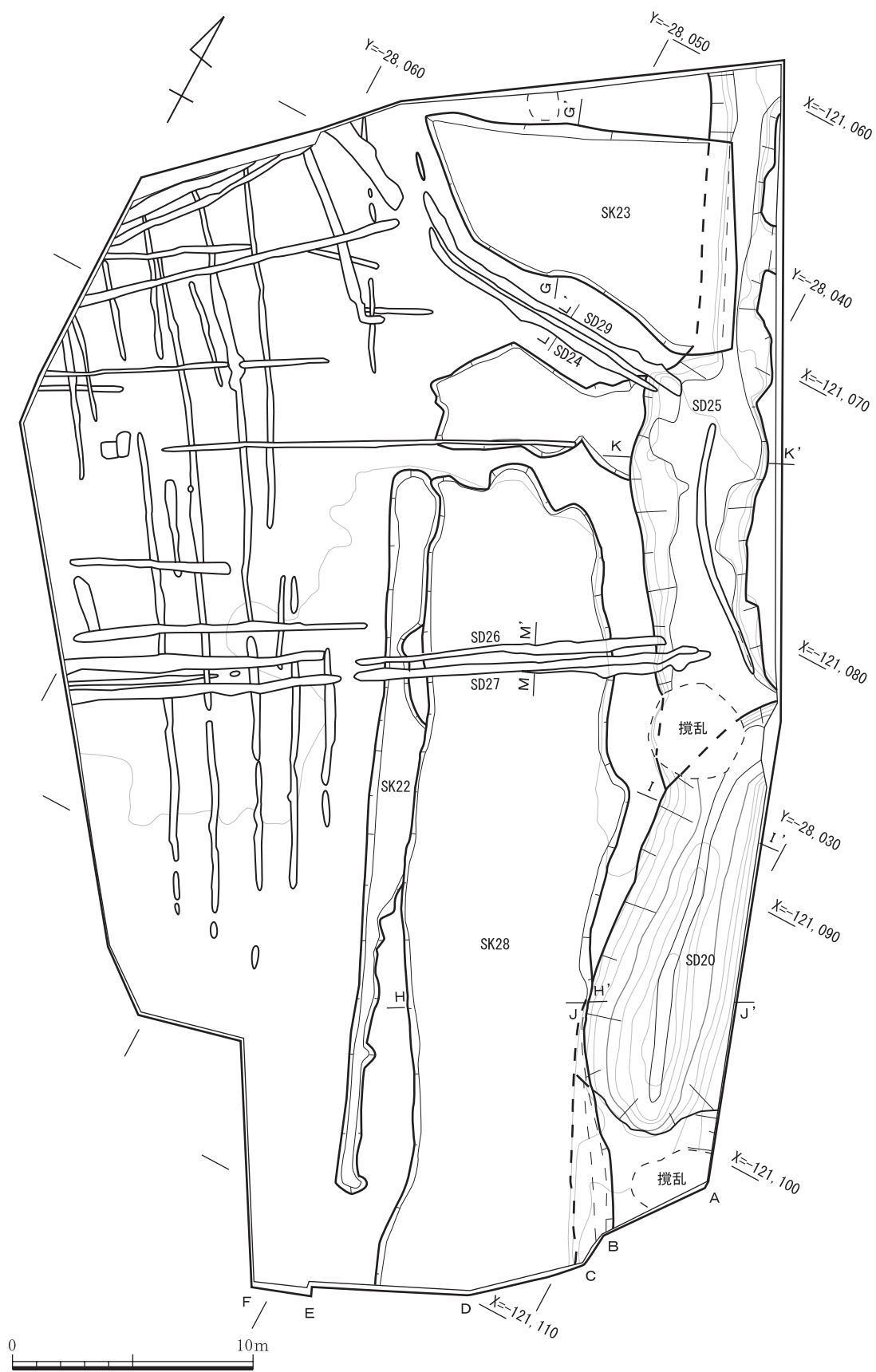
耕作溝群 c3-2・c3-3地区を中心に幅0.3m前後の耕作溝群を検出した。北西-南東方向の溝群が先行し、南西-北東方向の溝群が後出する。前者はc2-1地区では検出されず、後者は S D24と S D26の間でのみ検出される。

2) 北部調査区第2遺構面の遺構

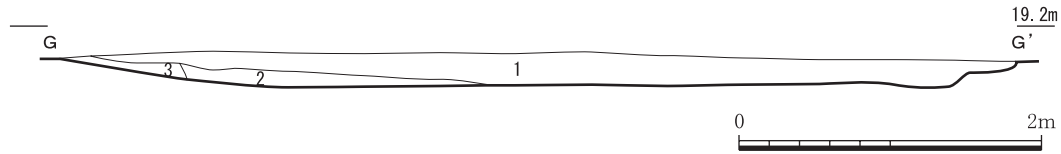
第1遺構面の下層の灰色礫混じり粘質土など (第12図1~5層) を除去すると、第2遺構面とな



第5図 c2-1・c3-2地区南壁断面図(S=1/50)

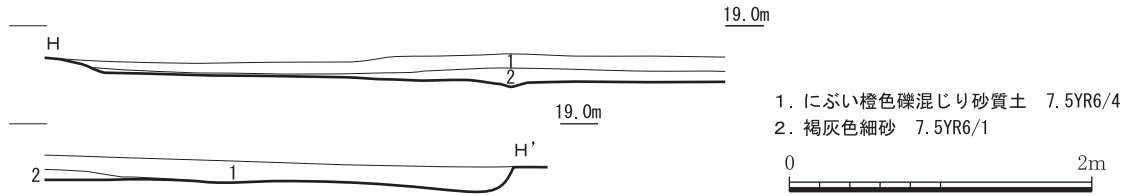


第6図 北部(c2-1・c3-2・c3-3地区)遺構平面図(近世)(S=1/250)



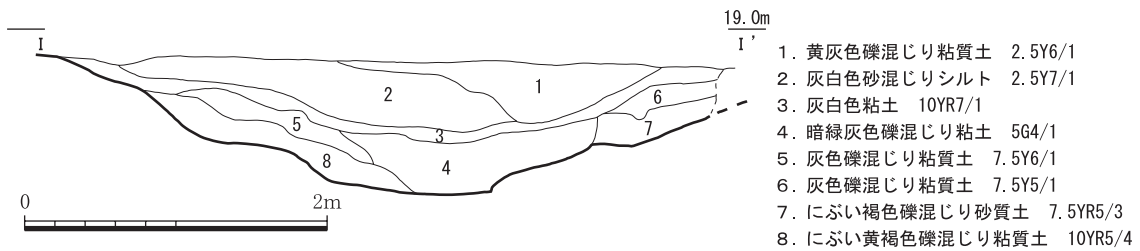
1. 灰白色礫混じり粘質土 10YR7/1 2. 褐灰色粘質土 10YR6/1 3. 明黄褐色砂 10YR6/6

第7図 c2-1地区土坑 S K 23断面図(S=1/50)

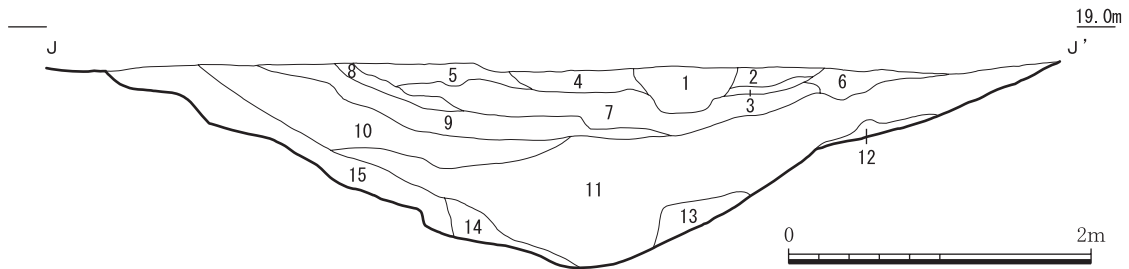


1. にぶい橙色礫混じり砂質土 7.5YR6/4
2. 褐灰色細砂 7.5YR6/1

第8図 c2-1地区土坑 S K 28断面図(S=1/50)

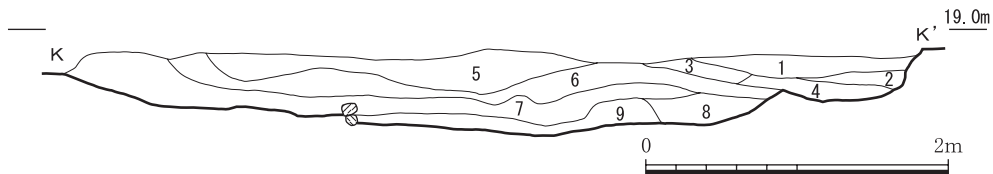


1. 黄灰色礫混じり粘質土 2.5Y6/1
2. 灰白色砂混じりシルト 2.5Y7/1
3. 灰白色粘土 10YR7/1
4. 暗緑灰色礫混じり粘土 5G4/1
5. 灰色礫混じり粘質土 7.5Y6/1
6. 灰色礫混じり粘質土 7.5Y5/1
7. にぶい褐色礫混じり砂質土 7.5YR5/3
8. にぶい黄褐色礫混じり粘質土 10YR5/4



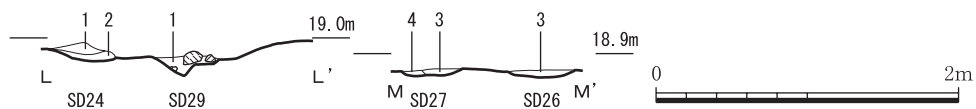
1. 灰褐色礫混じり粘土 5YR5/2 2. 黄灰色粘土 2.5Y6/1 3. 淡灰色シルト 5Y8/4
4. 黄灰色砂混じりシルト 2.5Y6/1 5. 灰白色礫混じり粘質土 5Y7/1 6. 灰色礫混じりシルト 5Y6/1
7. 灰褐色粘土 10YR6/1 8. 灰褐色礫混じり粘質土 10YR6/1 9. 灰白色粘土 10YR7/1
10. 灰褐色礫混じり粘質土 7.5YR5/2 11. 暗青灰色粘土 5BG4/1 12. 灰色シルト 5Y6/1
13. 青灰色礫混じり粘質土 5BG5/1 14. 緑灰色礫混じり粘質土 10G5/1 15. にぶい黄褐色礫混じり粘質土 10YR5/4

第9図 c2-1地区溝 S D 20断面図(S=1/50)



1. 黄橙色砂 10YR7/8 2. 明黄褐色砂 10YR6/6 3. 青灰色粘土 5BG6/1
4. 明黄褐色礫混じり砂 10YR6/8 5. 灰白色砂礫 5YR8/1 6. 浅黄橙色砂礫 7.5YR8/4
7. 青灰色砂混じり粘質土 10BG6/1 8. 明褐色礫混じり砂 7.5YR5/6 9. 灰色礫混じり砂 5Y6/1

第10図 c2-1地区溝 S D 25断面図(S=1/50)



1. 灰色砂礫 5Y5/1 2. オリーブ灰色シルト 3. 黄灰色粘質土 2.5Y6/1 4. 灰黄色粘質土 2.5Y7/2

第11図 c2-1地区溝 S D 24・29、溝 S D 26・27断面図(S=1/50)

る。第2遺構面は東に向かって低くなっており、平安時代の溝などを検出した。

溝S D30 (第12～15図) c2-1地区で検出した溝である。南北40m余りを検出し、南端は調査区外に延びる。幅は6m以上で、東肩は第1遺構面のS D20・25によって削平されている。南側2/3は西肩に沿って1m前後の幅で深くなっており、南端から約15m付近が最も深くなっている。この部分は常に滞水していたようで、青灰色～黒灰色系のシルトや粘土が堆積しており、西肩には護岸の杭が打たれていた。鎌倉時代前期の遺物が出土した。

溝S D36 (第13・19図) c3-2・c3-3地区で検出した南部調査区から続く。北端はc3-3地区南端付近で西に折れて調査区外に延びる。断面形は西肩が急傾斜であるのに対して、東は緩傾斜で肩の位置が不明瞭である。灰褐色～黒褐色系の細砂を主体とする砂質土が堆積している。平安時代前期～中期の遺物が出土した。

溝S D50 (第13・16図) c3-2・c3-3地区で検出した溝である。幅約4mを測り、長さ14.5m分を検出した。西端は調査区外に延びる。深さは最深部で約0.9mを測る。平安時代後期の遺物が出土した。

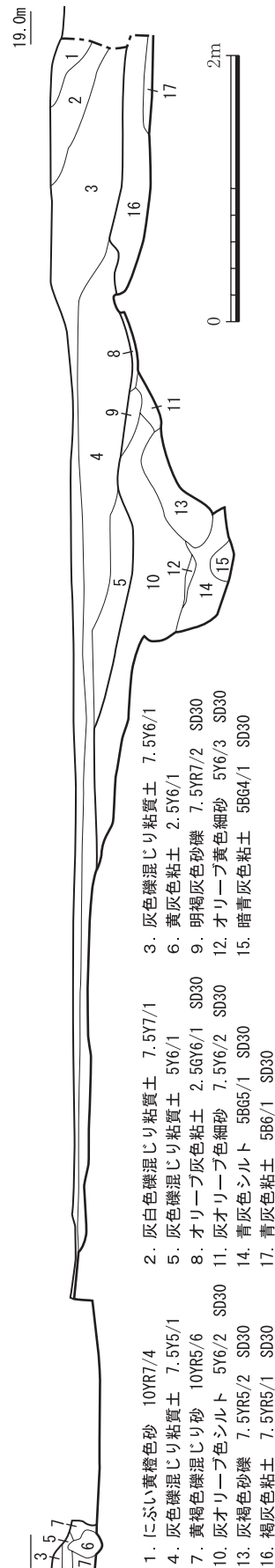
土坑S K34 (第13・17図) c2-1地区北端で検出した土坑である。幅約2mを測り、北端は調査区外に延びる。埋土は2層に分かれ、上層は褐灰色粘質土、下層は青灰色粘土である。土坑としたが、S D30西肩の延長線上に位置することから、溝の一部の可能性がある。

ピットS P54・56・57 (第18図) c3-2地区南端で検出した3基のピットである。径0.15～0.25m、深さ0.1～0.15mを測る。建物を復原することはできないが、c3-2地区南壁(第5図23・24層)にもピットとみられるものが1基掛かっているため、S D36埋没後、この付近に小規模な建物が建っていたものと思われる。

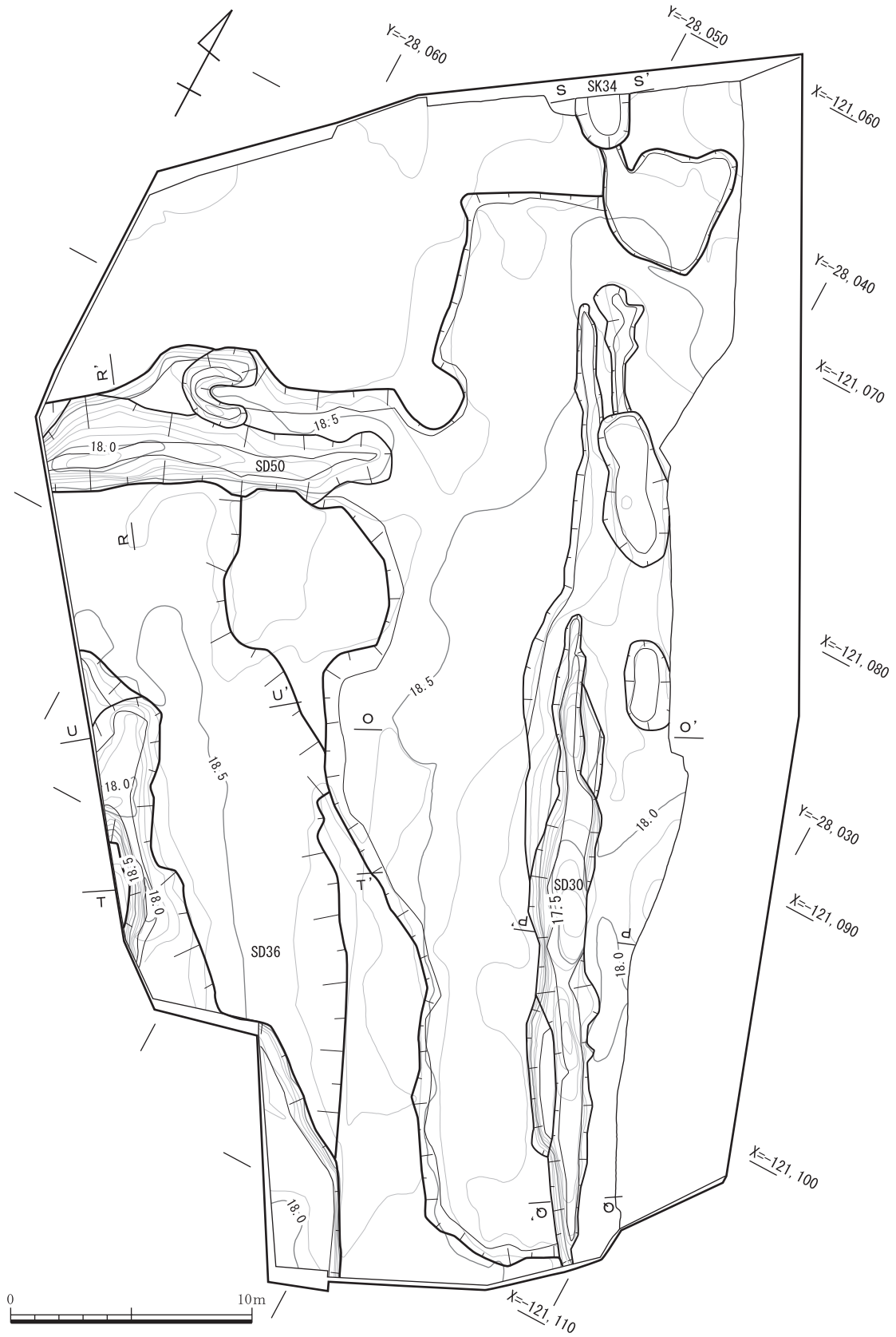
3) 南部調査区の遺構(第22図)

南部調査区はc2-2地区・c3-1地区の2地区に分けて調査を行った。調査面積は、それぞれ410㎡・390㎡である。南部調査区では遺構面は1面で、耕作土と灰白色の礫混じり粘質土などを除去した現地表面下約40cmの同一面で近世の遺構と古代・中世の遺構を検出した。検出した遺構は溝および流路などである。

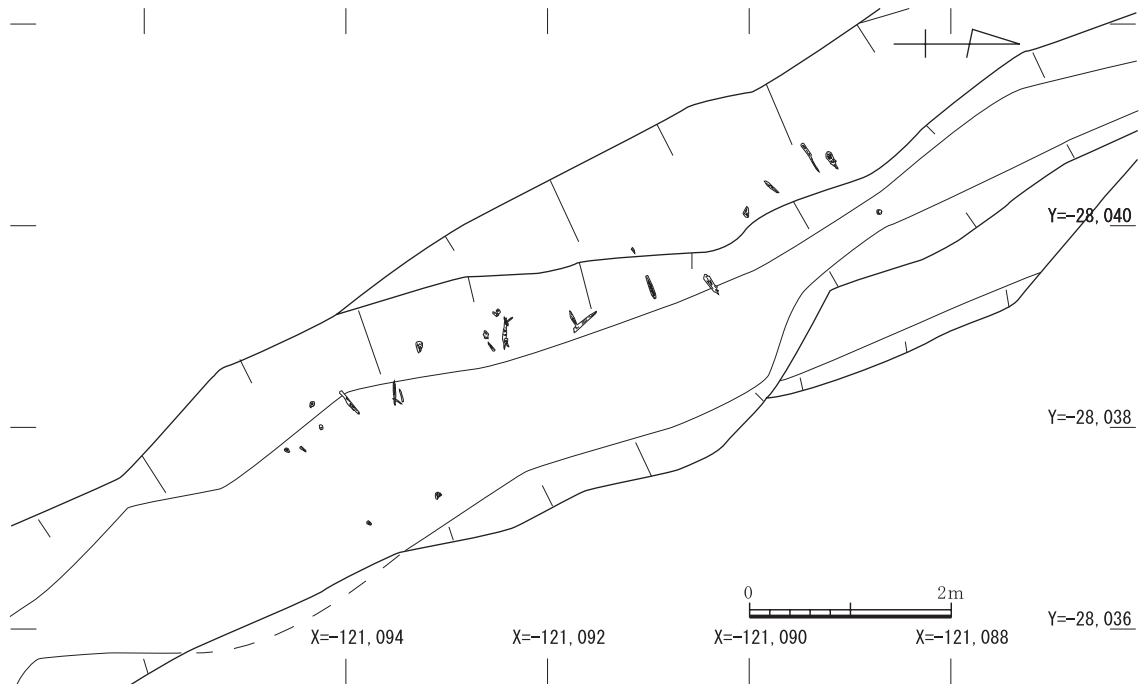
溝S D20 (第20図) 北西から南東に延びる溝である。c2-1地



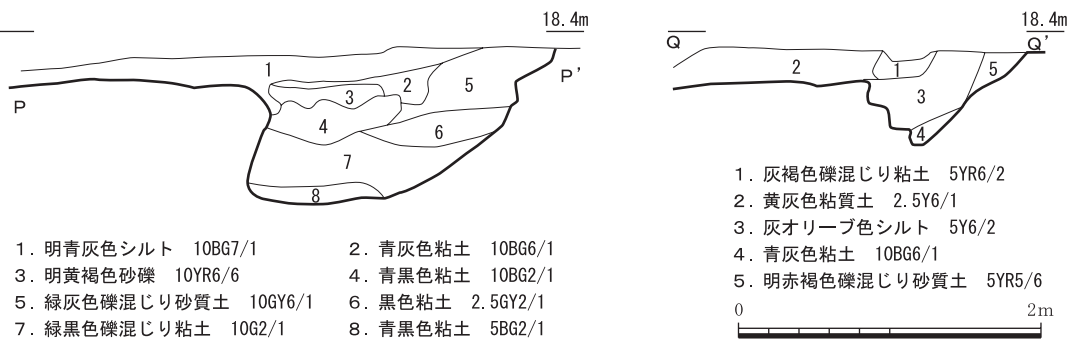
第12図 c2-1地区中央東西断面図(S=1/50)



第13図 北部(c2-1・c3-2・c3-3地区)遺構平面図(古代・中世)(S=1/250)



第14図 c2-1地区溝 S D 30平面図(S=1/75)

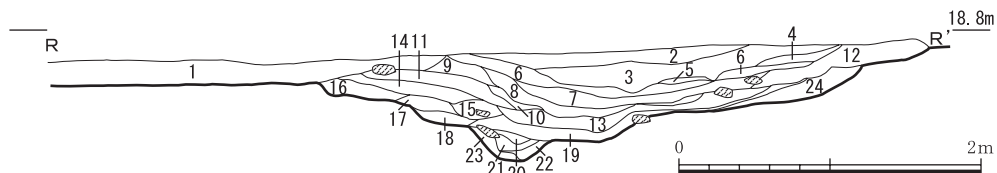


- 1. 明青灰色シルト 10BG7/1
- 3. 明黄褐色砂礫 10YR6/6
- 5. 緑灰色礫混じり砂質土 10GY6/1
- 7. 緑黒色礫混じり粘土 10G2/1

- 2. 青灰色粘土 10BG6/1
- 4. 青黒色粘土 10BG2/1
- 6. 黒色粘土 2.5GY2/1
- 8. 青黒色粘土 5BG2/1

- 1. 灰褐色礫混じり粘土 5YR6/2
- 2. 黄灰色粘質土 2.5Y6/1
- 3. 灰オリーブ色シルト 5Y6/2
- 4. 青灰色粘土 10BG6/1
- 5. 明赤褐色礫混じり砂質土 5YR5/6

第15図 c2-1地区溝 S D 30断面図(S=1/50)

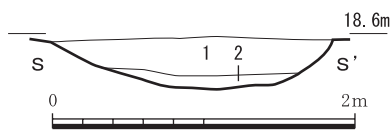


- 1. 灰黄褐色粘質土 10YR6/2
- 4. 灰黄褐色砂質土 10YR5/2
- 7. 灰オリーブ粘質土 7.5Y6/2
- 10. 浅黄褐色砂質土 10YR8/3
- 13. 灰白色粘質土 7.5Y8/2
- 16. 浅黄色砂質土 7.5Y7/3
- 19. 灰黄色砂質土 2.5Y7/2
- 22. 灰白色粘質土

- 2. 灰黄褐色砂質土 10YR4/2
- 5. 暗褐色砂質土 10YR3/3
- 8. 黒褐色砂質土 10YR2/2
- 11. 黄橙色砂質土 10YR8/6
- 14. 浅黄色砂質土 2.5Y7/3
- 17. 灰黄色砂質土 2.5Y6/2
- 20. 灰白色粘質土
- 23. 灰黄褐色砂質土 10YR4/2

- 3. 褐灰色砂質土 10YR5/1
- 6. 黒褐色砂質土(炭化物を含む) 10YR2/2
- 9. 灰白色砂質土 7.5Y7/1
- 12. にぶい黄橙色砂質土 10YR7/2
- 15. 黒褐色礫 10YR3/1
- 18. 灰黄色砂 2.5Y6/2
- 21. にぶい黄橙色砂質土 10YR6/3
- 24. にぶい黄褐色砂質土 10YR5/3

第16図 c3-3地区溝 S D 50断面図(S=1/50)

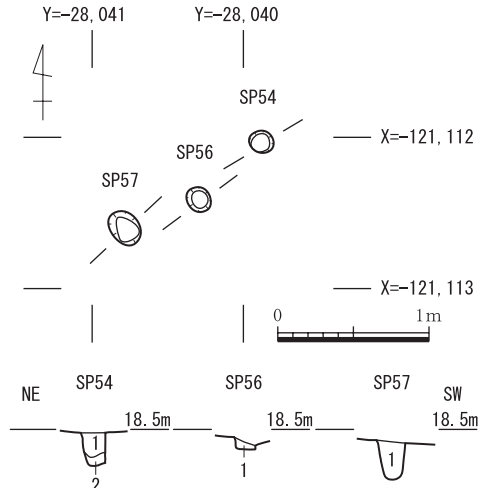


- 1. 褐灰色粘質土 5YR4/1
- 2. 青灰色粘土 5B5/1

第17図 c2-1地区土坑 S K 34断面図(S=1/50)

区第2遺構面のS D 20に続く同一の溝と思われる。幅2.8~3.8m、深さ約0.5mを測る。埋土は砂礫を主体とする。

溝 S D 21 (第20図) c2-2地区北西部で検出した S D 20以前の遺構である。溝としたが、東端は調査区外に延びて不明であり、土坑の可能性もある。埋土は上層が灰色礫混じり砂質



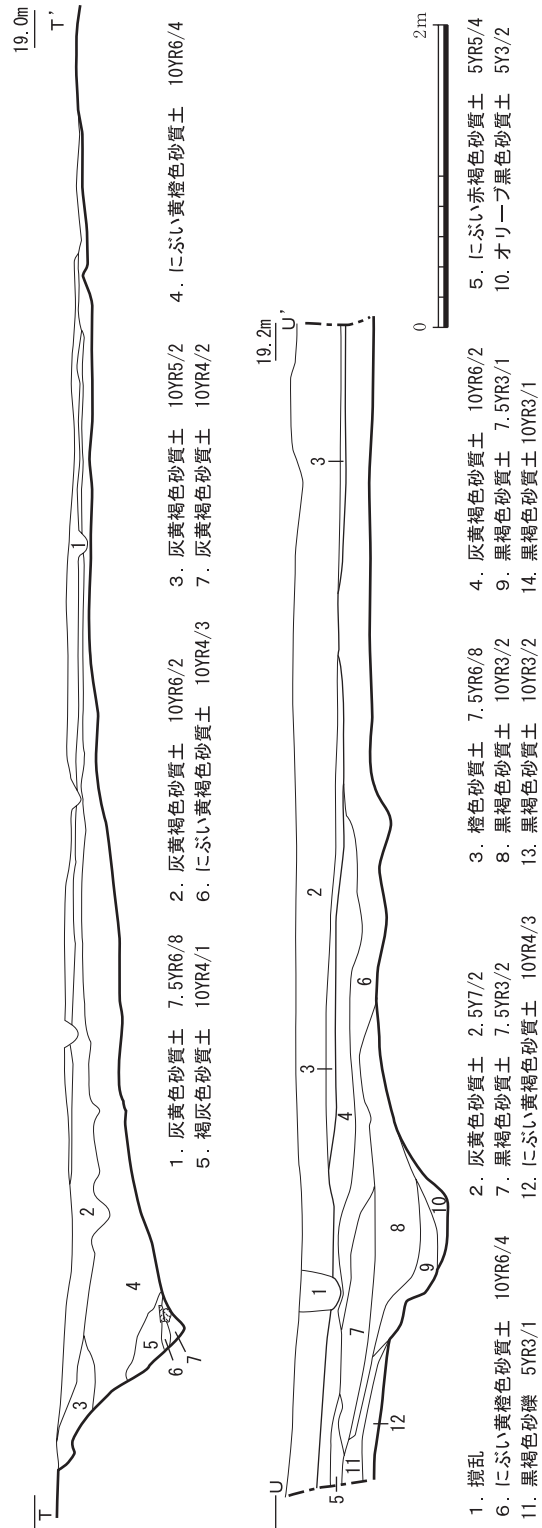
1. 褐灰色砂質土 5YR6/1 2. 褐灰色粘質土 5YR5/1
第18図 c3-2地区ピット平面図・断面図(S=1/50)

土などを主体とし、下層は青灰色礫混じり粘土や礫混じりのシルトを主体とする。埋没時期を特定できる遺物は出土しなかった。

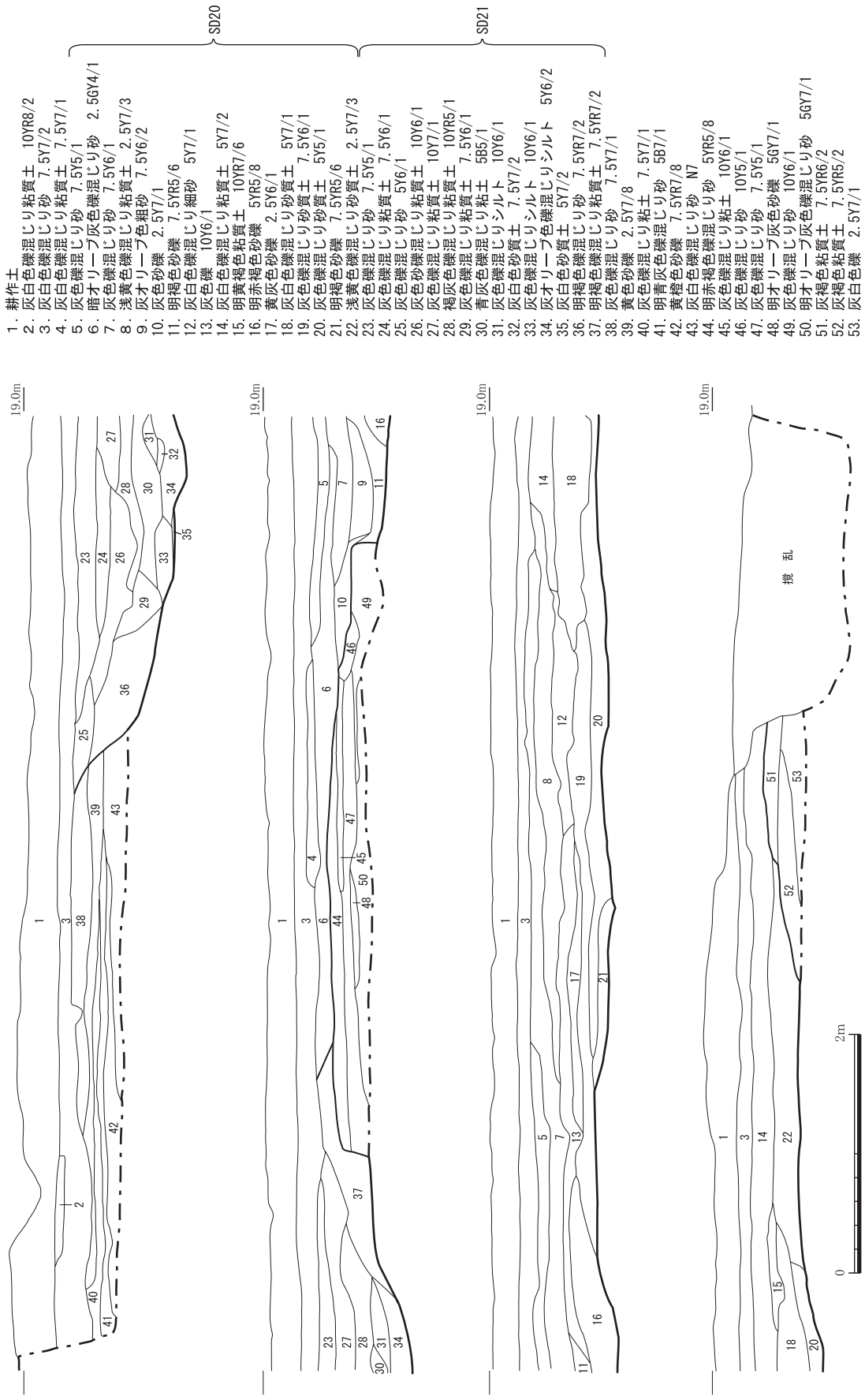
溝SD15(第23図) c3-1地区北東部からc2-2地区に続く溝である。西北西から東南東方向に延び、幅は西北西端では2.0m、東南東端で7.5mと東に向かって広がる。深さは西北西端では約0.2mと浅いが、SD16と切りあう部分では約0.7mを測り、東南東端では約0.3mと再び浅くなる。埋土は黄褐色系の砂質土が主体で、前述のSD16と切りあう深い部分では最下層に灰白色の粘土が堆積する。出土遺物は少ないが、平安時代中期～後期の土器片が出土した。

溝SD16(第24図) c2-2地区からc3-1地区に続く溝である。SD15とSX37に先行しSD36に後出する。埋土は赤褐色砂礫を主体とする。土師器皿・緑釉陶器碗など平安時代中期の土器が出土した。

流路SD36(第21・27図) 北部調査区から続きc3-1地区の大半を占める。断面形は西肩が急傾斜であるのに対して、東は緩傾斜で肩の位置が不明瞭であり、c2-2地区を調査している段階では肩を認識できなかった。溝として調査をはじめ、その後、流路と判明したが、遺構の略号はSDのままとした。深さは最深部で約1.4mを測る。埋土は、上層が砂質土や粘質土を主体とし、下層は砂礫を主体とする。南半部の上層下位を中心に平安時代前期～中期の遺物が多量に出土した。



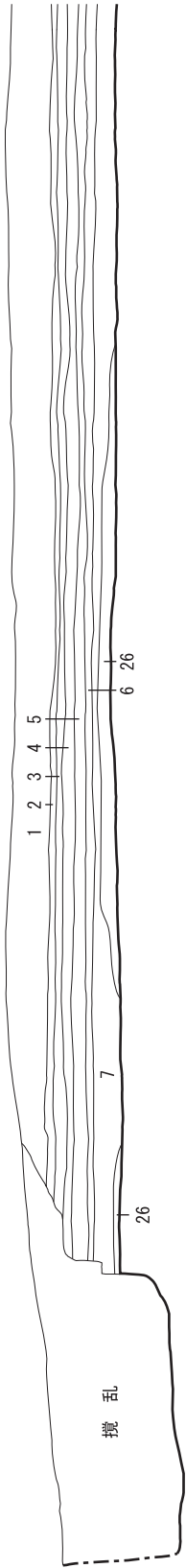
第19図 c3-2地区溝SD36断面図(S=1/50)



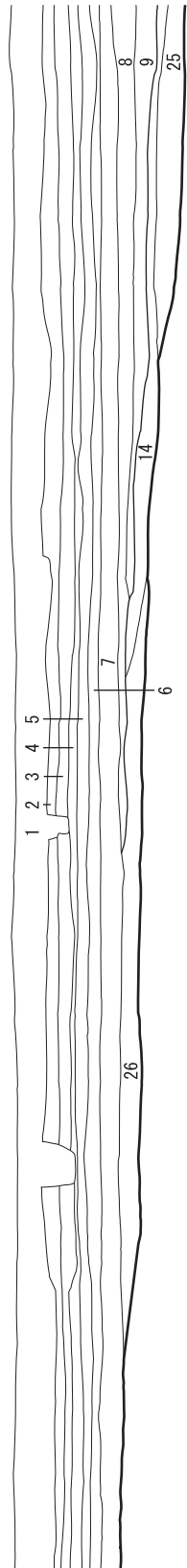
1. 耕作土
2. 灰白色礫混じり粘質土 10YR8/2
3. 灰白色礫混じり砂 7.5Y7/2
4. 灰白色礫混じり粘質土 7.5Y7/1
5. 灰白色礫混じり砂 7.5Y5/1
6. 暗オリーブ灰色礫混じり砂 2.5G4/1
7. 灰色礫混じり砂 7.5Y6/1
8. 浅黄色礫混じり粘質土 2.5Y7/3
9. 灰オリーブ色粗砂 7.5Y6/2
10. 灰色砂礫 2.5Y7/1
11. 明褐色砂礫 7.5YR5/6
12. 灰白色礫混じり細砂 5Y7/1
13. 灰色礫 10Y6/1
14. 灰白色礫混じり粘質土 5Y7/2
15. 明黄褐色粘質土 10YR7/6
16. 明赤褐色砂礫 5YR5/8
17. 黄灰色砂礫 2.5Y6/1
18. 灰白色礫混じり砂質土 5Y7/1
19. 灰色礫混じり砂質土 7.5Y6/1
20. 灰色礫混じり粘質土 5Y5/1
21. 明褐色砂礫 7.5YR5/6
22. 浅黄色礫混じり砂質土 2.5Y7/3
23. 灰色礫混じり砂 7.5Y5/1
24. 灰色礫混じり粘質土 7.5Y6/1
25. 灰色礫混じり砂 5Y6/1
26. 灰白色礫混じり粘質土 10Y6/1
27. 灰色礫混じり粘質土 10Y7/1
28. 褐灰色礫混じり粘質土 10YR5/1
29. 灰色礫混じり粘質土 7.5Y6/1
30. 青灰色礫混じり粘土 5B5/1
31. 灰色礫混じりシルト 10Y6/1
32. 灰白色砂質土 7.5Y7/2
33. 灰色礫混じりシルト 10Y6/1
34. 灰オリーブ色礫混じりシルト 5Y6/2
35. 灰白色砂質土 5Y7/2
36. 明褐色礫混じり砂 7.5YR7/2
37. 明褐色礫混じり粘質土 7.5YR7/2
38. 灰色礫混じり砂 7.5Y7/1
39. 黄色砂礫 2.5Y7/8
40. 灰色礫混じり粘土 7.5Y7/1
41. 明青灰色礫混じり砂 5B7/1
42. 黄褐色砂礫 7.5YR7/8
43. 灰白色礫混じり砂 N7
44. 明赤褐色礫混じり砂 5YR5/8
45. 灰色礫混じり粘土 10Y6/1
46. 灰色礫混じり砂 10Y5/1
47. 灰色礫混じり砂 7.5Y5/1
48. 明オリーブ灰色砂礫 5G7/1
49. 灰色礫混じり砂 10Y6/1
50. 明オリーブ灰色礫混じり砂 5G7/1
51. 灰褐色粘質土 7.5YR6/2
52. 灰褐色粘質土 7.5YR5/2
53. 灰白色礫 2.5Y7/1

第20図 c2-2地区東壁断面図(S=1/50)

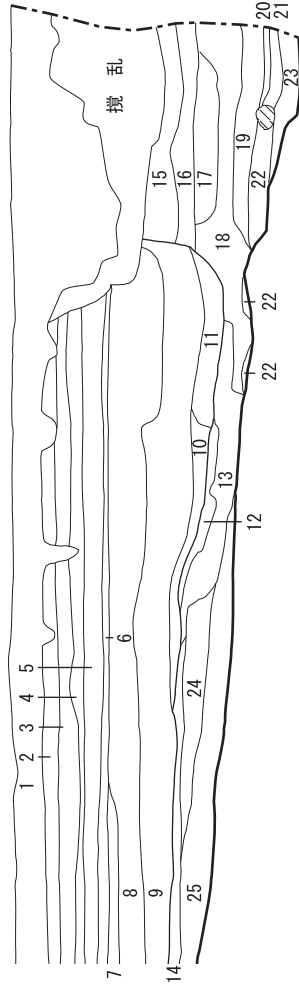
19. 2m



19. 2m

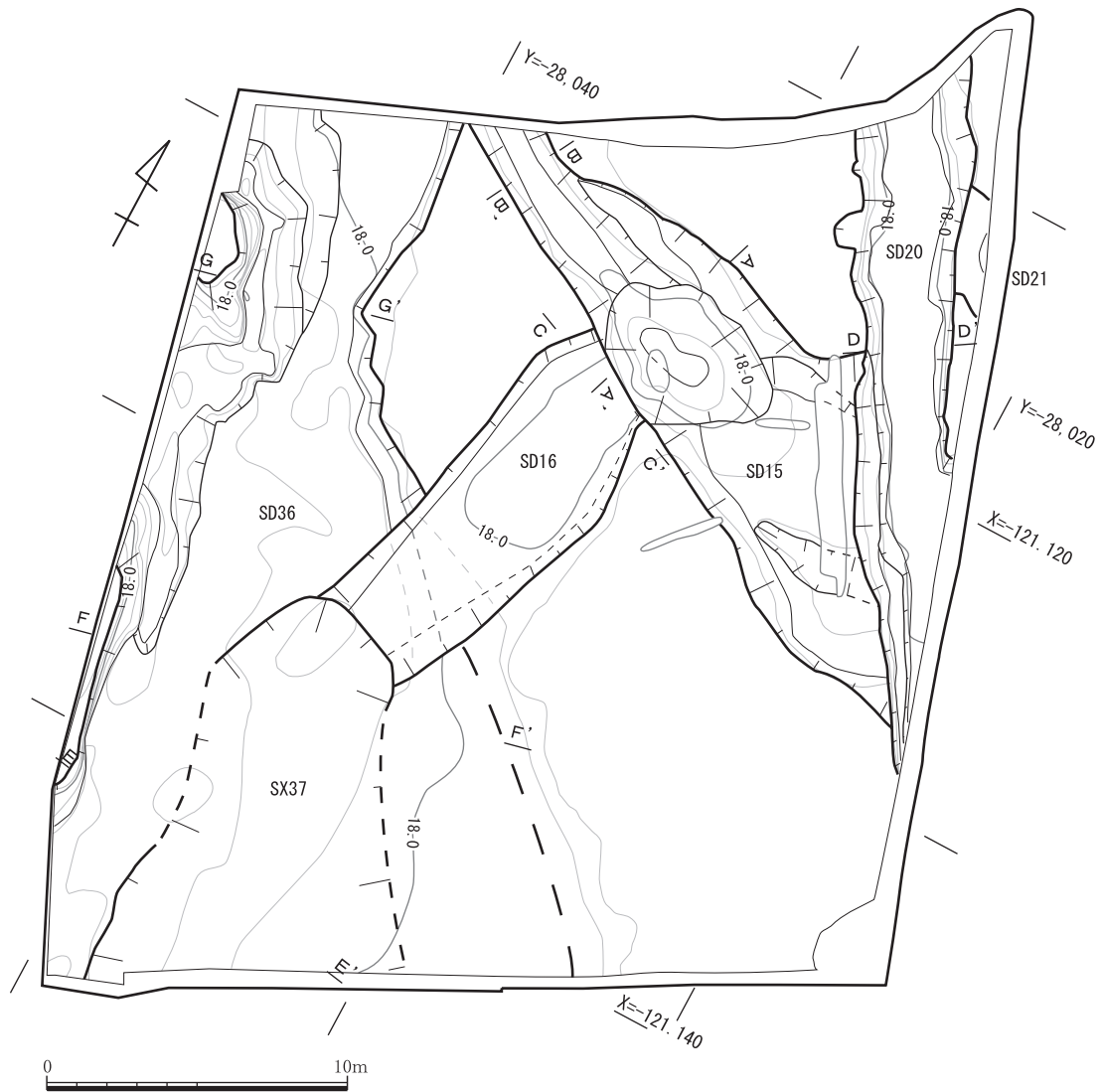


19. 2m

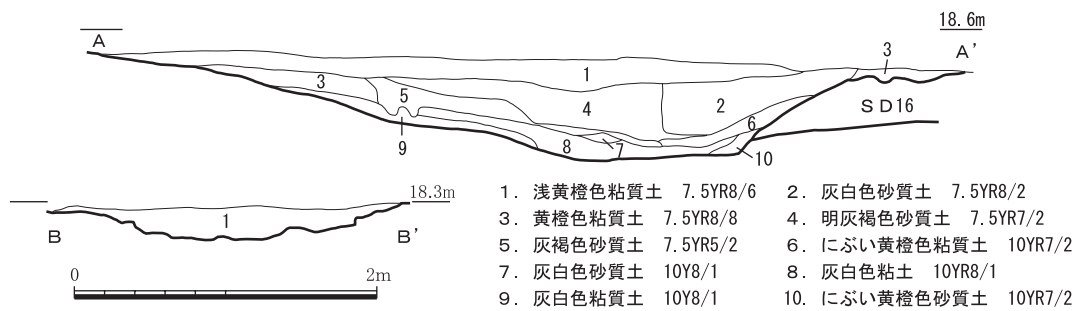


- 1. 表土
- 2. 浅黄色粘質土 2.5Y7/4
- 3. 灰黄色粘質土 2.5Y7/2
- 4. 黄橙色粘質土 10YR7/8
- 5. にぶい黄橙色粘質土 10YR7/2
- 6. 明黄褐色粘質土 10YR6/6
- 7. 灰褐色粘質土 7.5YR4/2
- 8. 暗褐色粘質土 10YR3/4 SX37
- 9. にぶい褐色粘質土 7.5YR6/3 SX37
- 10. 浅黄色砂質土 7.5YR7/1 SX37
- 11. 暗褐色細礫 10YR3/3 SX37
- 12. 灰色粘質土 7.5Y7/1 SD36
- 13. 青灰色粘質土 5B66/1 SD36
- 14. 明赤褐色粘質土 5YR5/8 SD36
- 15. 褐色粘質土 10YR4/4 SD36
- 16. 褐色粘質土 7.5YR4/4 SD36
- 17. 緑灰色礫混じり粘質土 10G6/1 SD36
- 18. 青灰色粘質土 5B65/1 SD36
- 19. 暗青灰色礫混じり粘質土 5B4/1 SD36
- 20. 青灰色細砂 10B66/1 SD36
- 21. 暗青灰色粘土 5B4/1 SD36
- 22. 浅黄色砂 2.5Y7/3 SD36
- 23. 明赤褐色礫混じり粗砂 5YR5/6 SD36
- 24. にぶい黄褐色砂 10YR6/4 SD36
- 25. 暗褐色礫混じり砂 7.5YR3/3 SD36
- 26. にぶい赤褐色礫混じり粘質土 2.5YR4/3 SD36

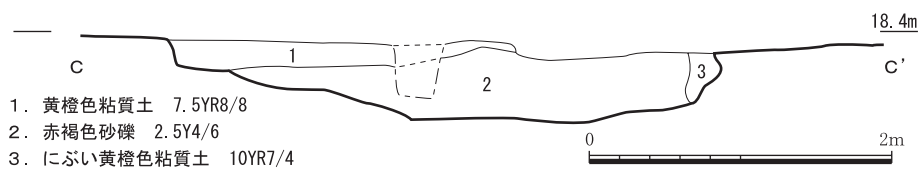
第21図 c2-2・c3-1地区南壁断面図(S=1/50)



第22図 南部(c2-2 · c3-1地区)遺構平面図(S=1/250)

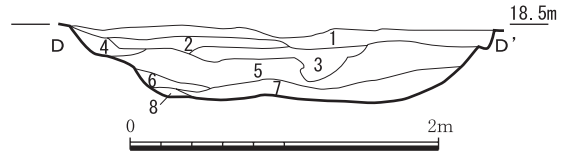


第23図 c2-2 · c3-1地区溝SD15断面図(S=1/50)



第24図 c2-2地区溝SD16断面図(S=1/50)

落ち込み S X 37 (第21・26・27図) S D 36
 の埋没後に南半部の上層が削られた落ち込みに
 多量の遺物が西側から投棄されており、こ
 の落ち込みを S X 37とした。S D 36と同様に
 西側の肩の方が傾斜がきつく、東側は緩やか
 であることから、流路の一部である可能性が
 高い。埋土は明褐色粘質土を主体とする。南
 半部の西寄りでは平安時代後期の遺物がまと
 まって出土した。



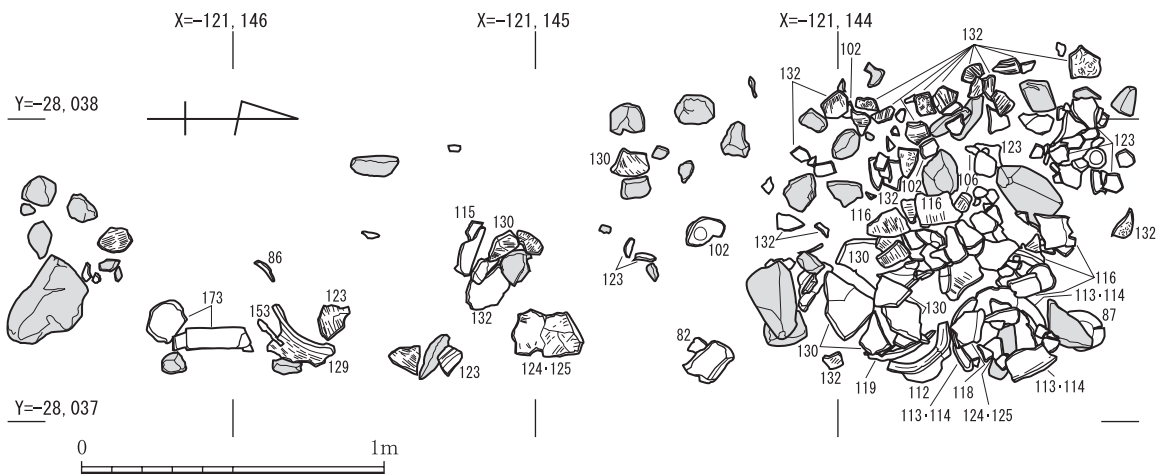
1. 灰白色礫混じり粘質土 2.5GY8/1
2. 明オリーブ灰色礫混じり粘質土 2.5GY7/1
3. 灰白色礫混じり砂質土 5GY8/1
4. 明オリーブ灰色礫混じり粘質土 5GY7/1
5. 明緑灰色シルト混じり砂礫 10GY7/1
6. 灰白色砂 7.5Y7/2
7. 明褐色砂礫 7.5YR7/1
8. 明黄褐色粗砂 2.5Y7/6

第25図 c2-2地区溝 S D 20断面図(S=1/50)

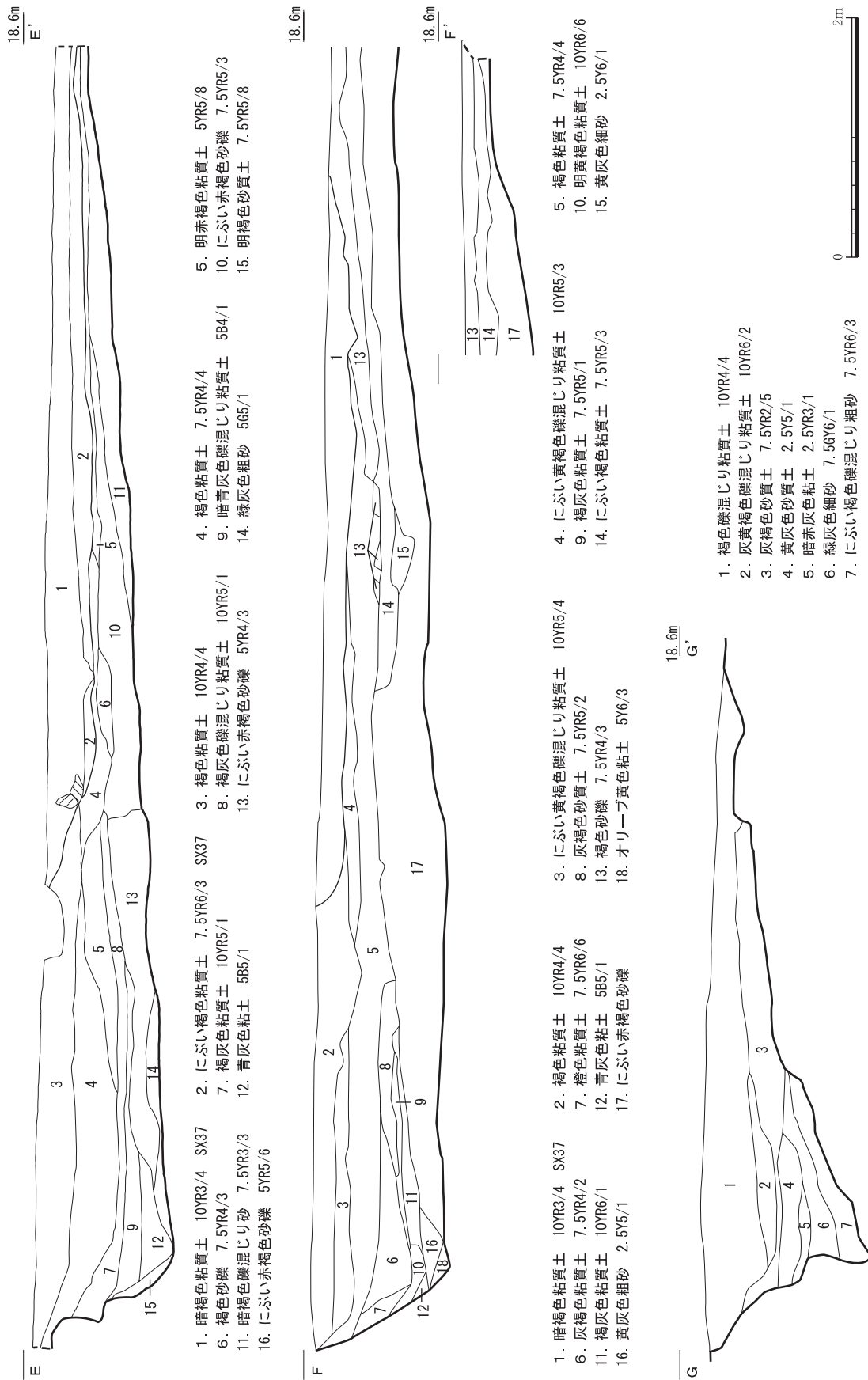
3. 出土遺物

今回の調査では、遺物整理箱30箱の遺物が出土したが、その大半は S D 36と S X 37の出土遺物
 である。

流路 S D 36 (第28～30図) 1は土師器皿である。平らな底部から短い口縁部がやや外反気味
 に立ち上がり、端部はわずかに折り返す。2～18は土師器杯である。2は外面の全面にヘラケズ
 リを施すc手法であるが、他は口縁部にヨコナデを施すe手法である。平らな底部から内湾して
 立ち上がり、口縁端部は外反した後、端部を小さく上方に摘み上げるが、15は丸みを持った底部で、
 外反する口縁部の端部は丸く納める。2は底部外面に3条の焼成後の線刻が認められる。14は口
 縁部外面のヨコナデの下方に竹管状の刺突が並ぶ。e手法のものには器壁の薄いもの(3～6)と
 厚いものがある。16～18は高台を持つ平らな底部から16は直線的に、17・18は丸みを持って立ち
 上がり、口縁端部を小さく上方に摘み上げる。16にはナデの弱い部分にハゲが残る。19～26は須
 恵器杯である。19・20は口縁部が高台脇から直線的に立ち上がる。19の内面には重ね焼きの痕跡
 がみられる。21～26は回転ヘラ切りの底部からわずかに内湾して立ち上がる。27・28は須恵器蓋
 である。ヘラ切り未調整の平らな天井部から内湾した後、口縁端部は外に引き出して下方に短く
 屈曲し、尖り気味に納める。29～32は無釉陶器である。29は蛇の目高台からわずかに内湾して立

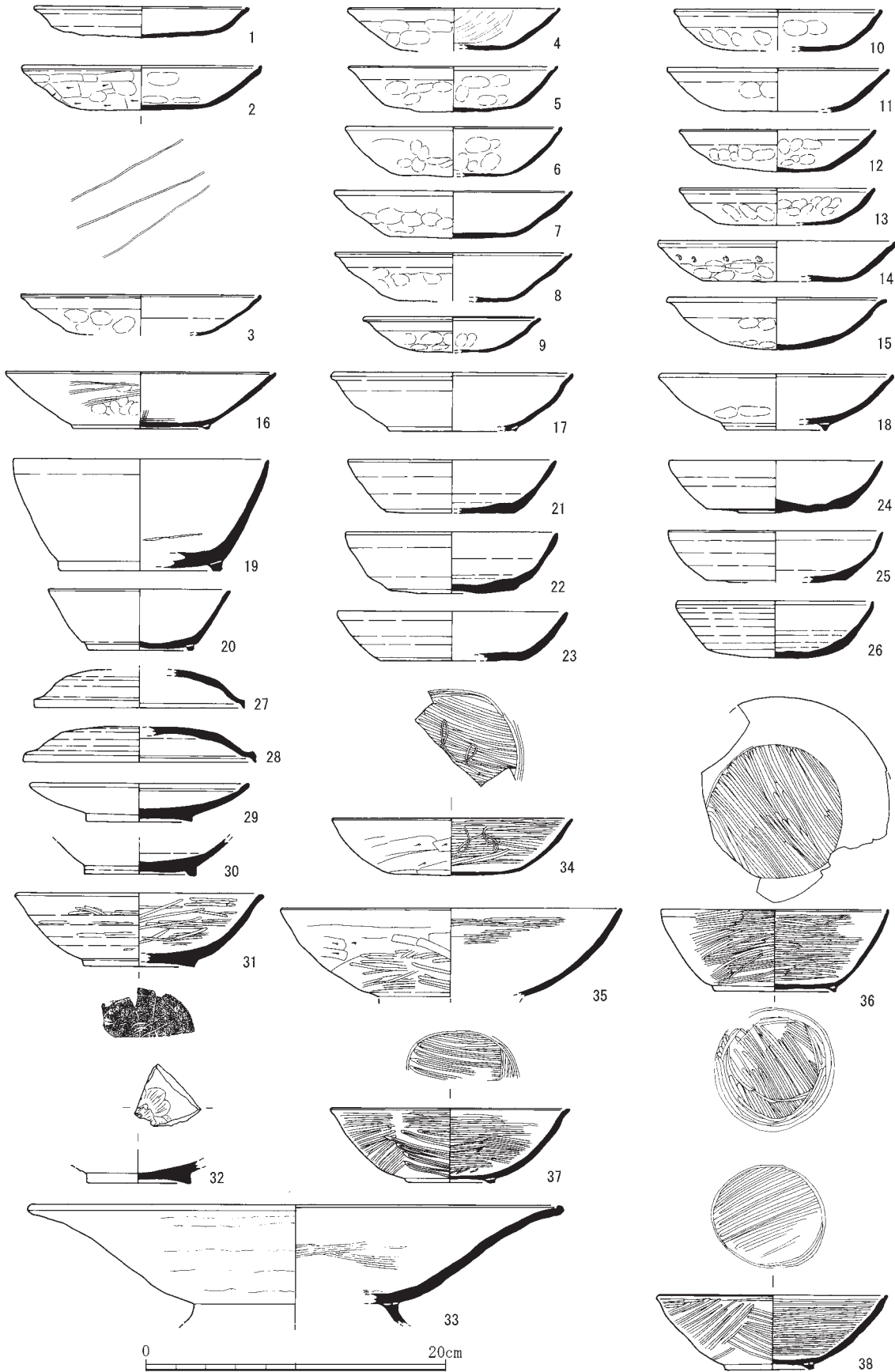


第26図 c3-1地区落ち込み S X 37遺物出土状況図(S=1/25)

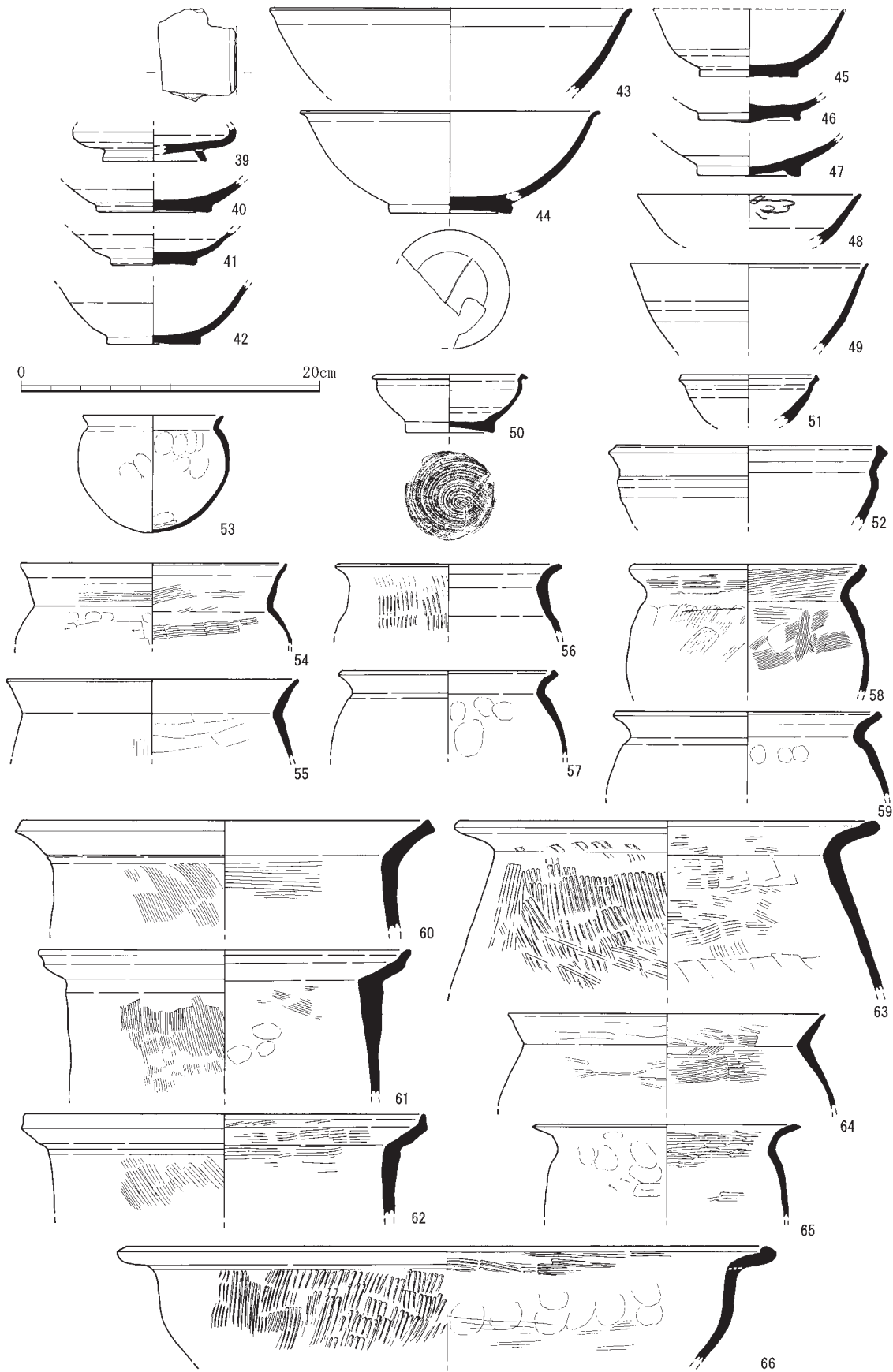


第27図 c3-1地区流路S D36、落ち込みS X37断面図(S=1/50)

ち上がり、口縁端部は丸く納める皿で、口縁部内端からやや下がった位置に1条の凹線をめぐらせる。内面の中央からずれた位置に重ね焼きの痕跡がみられる。暗灰色を呈し、焼成は硬質であるが、高台の厚い部分はやや焼成が甘くなっている。篠窯産とみられる。30は削り出し輪高台の椀である。底部外面の中央付近を除いて密なヘラミガキが施される。暗灰色を呈し、焼成は良好である。31はやや上げ底気味の平高台から内湾して立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。外面の全面にヘラケズリの後、底部外面を除く全面にヘラミガキを施す。底部外面に2条の焼成前の線刻がみられる。明褐灰色から灰白色を呈し、焼成は良好である。32は平高台で見込みに陰刻花文が施される。灰色を呈し、硬質である。33は土師器鉢である。「ハ」字形に開く高台を持つ平らな底部から内湾して立ち上がり、口縁部上半部は外反して、端部は上方に折り返す。内面はナデ調整を施すが、ナデが弱い部分にはハケメが残る。外面は指押さえで軽く調整するが、粘土紐の継ぎ目が明瞭に残る。34・35は黒色土器A類杯である。34は外面の全面にヘラケズリを施した後、底部に軽いナデ調整、口縁端部にヨコナデ調整を施す。内面は見込み全体にジグザグのヘラミガキを施した後、口縁部に隙間のない圏線ミガキを施し、さらに底部と口縁部に暗文を施す。内面は銀黒色、外面の口縁端部付近は黒色、それ以下はにぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。35は外面はヘラケズリを施した後、口縁端部にヨコナデ調整を施し、全面に粗いヘラミガキを施す。高台は欠損しているが、高台脇に施したと思われるヨコナデがみられる。内面は隙間のない圏線ミガキを施し、「V」字形の連続する刻み模様を2段に施す。内面は黒色、外面の口縁端部付近は黒色、それ以下はにぶい黄橙色～橙色を呈し、焼成は良好である。36～38は黒色土器B類椀である。36は平らな広い底部から口縁部がわずかに内湾して立ち上がり、端部は尖り気味に納める。口縁内端からやや下がったところに1条の沈線をめぐらせる。内面は見込みにジグザグのヘラミガキを密に施した後、口縁部に隙間のない圏線ミガキを施す。外面は高台付近まで隙間のない分割ヘラミガキを施す。底部外面はやや隙間のあるジグザグのヘラミガキを施した後、数周の圏線ミガキを施す。37・38は口縁部内面に1条の沈線をめぐらせる。内面は見込みに密なジグザグ状暗文を施した後、口縁部に密な圏線ミガキを施す。外面は密な分割ヘラミガキを高台付近まで施す。底部外面にヘラミガキは施さない。37・38はc3-2地区南端のピット54・56・57を検出した面で出土しており、SD36埋没後の遺物である。39～48は緑釉陶器である。39は耳皿で、ヘラ切り後、輪高台を貼り付ける。灰色を呈する硬質の胎土で、明黄緑色の釉を全面に掛ける。40～44は軟質で淡黄緑色～黄緑色の釉を全面に掛ける。44は蛇の目高台の中に線刻がみられる。45～48は硬質でオリーブ緑色～淡緑色の釉を掛ける。48の内面には陰刻花文が施される。46・47は篠窯産とみられる。49は越州窯製青磁椀である。口縁部はわずかに内湾し、端部は小さく外反する。内外面とも釉薬にムラが多く露胎の部分がある。50～52は須恵器鉢である。53～63は土師器甕である。53は小型甕で球形の胴部に短く外折する口縁部が付く。内外面とも磨滅しているが、器面の凹凸が少ないことから板ナデにより調整されていると思われる。口縁部が「く」字形に外折して尖り気味に納めるもの(54・55)、外反して丸く納めるもの(56)、「く」字形に外反して端部を内側に短く折り返すもの(57～59・63)、寸胴の体部から「ハ」字形に外折するもの(60～62)



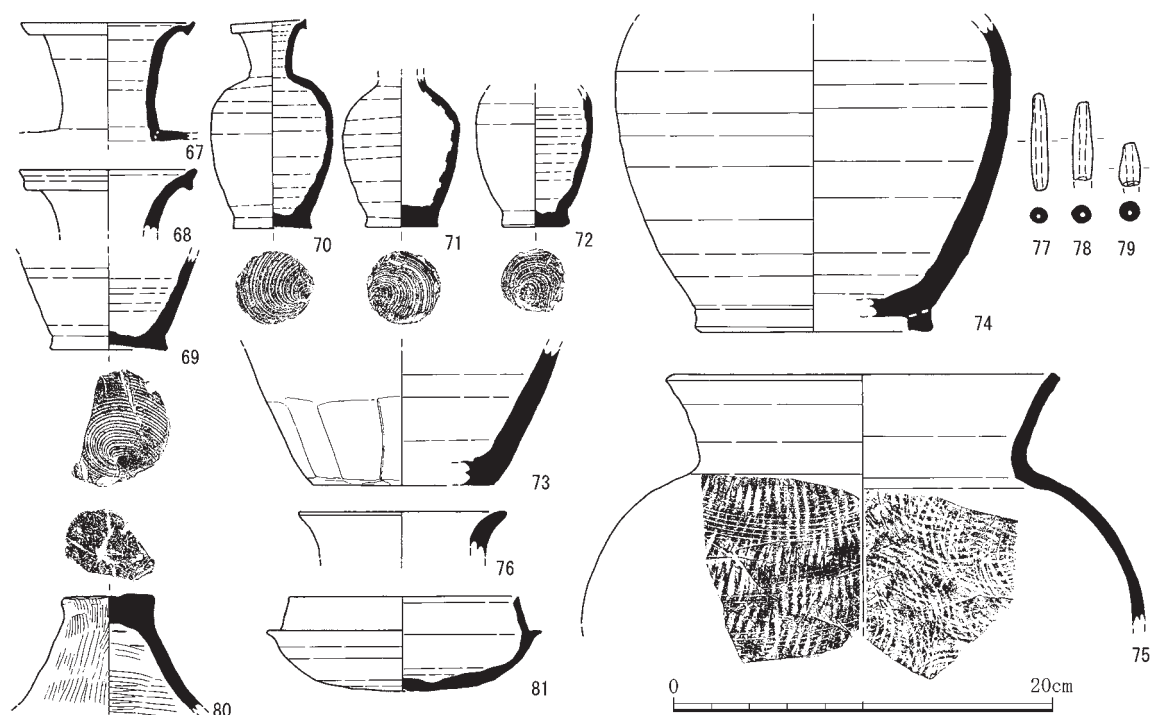
第28図 流路S D36出土遺物実測図(1)(S=1/4)



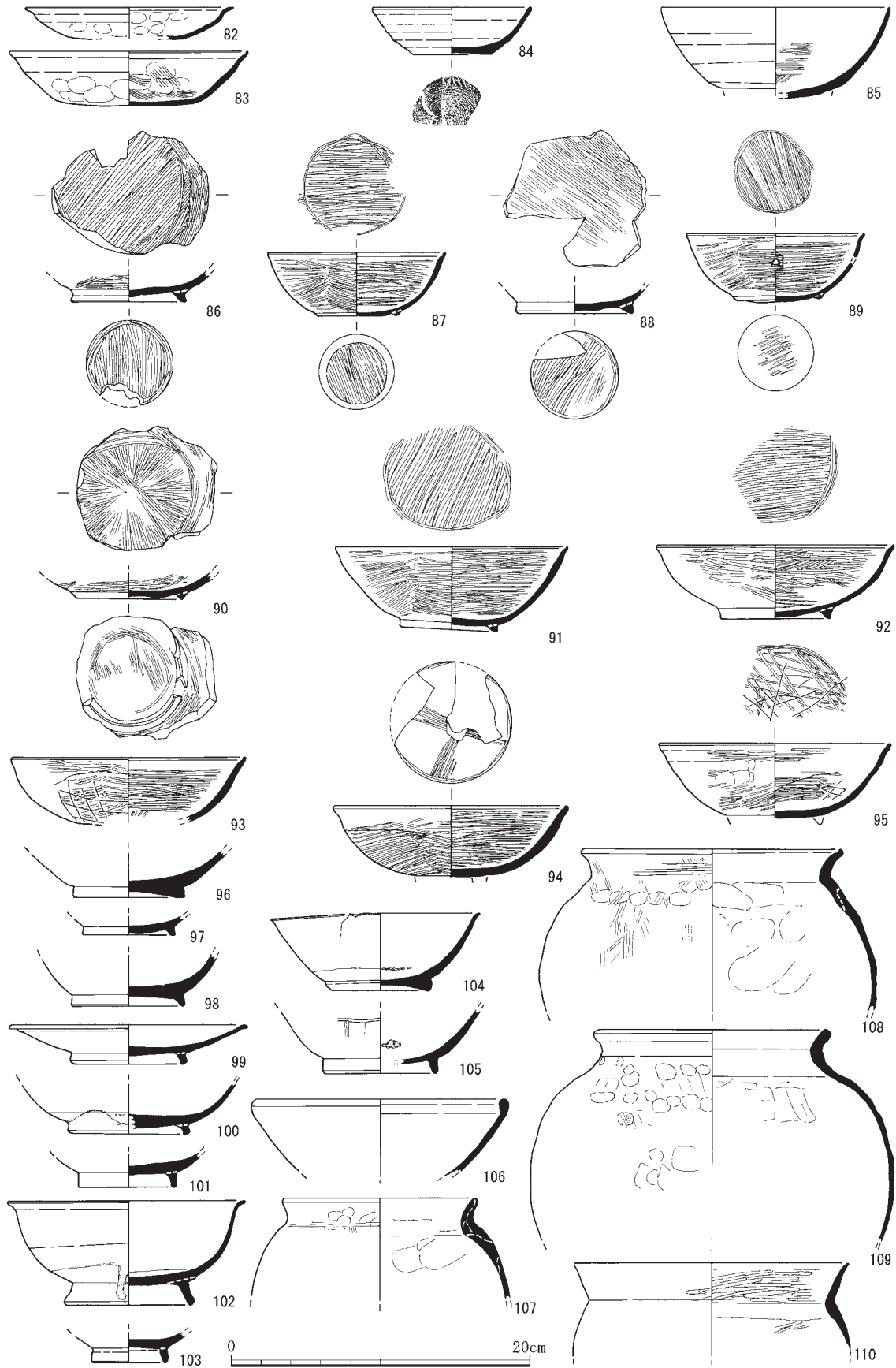
第29図 流路S D36出土遺物実測図(2)(S=1/4)

がある。64・65は黒色土器甕である。口縁部内面の横方向のヘラミガキのほか、64は体部内外面にもヘラミガキを施す。66は土師器鍋である。内面はハケ調整の後、体部上位にナデ調整を施す。体部外面は縦方向に粗いハケ調整を施す。67～75は須恵器壺である。74の高台脇には回転ナデの後に付いた布目痕跡が所々にみられる。76は緑釉陶器壺である。軟質で灰色の胎土に緑色を呈する釉を掛ける。77～79は土錘である。にぶい黄橙色～橙灰色を呈する。80は弥生時代中期の蓋形土器、81はTK10併行期の須恵器杯身である。

落ち込みS X37(第31～35図) 82は土師器皿である。口縁端部は外に引き出す。83は土師器杯、84は須恵器杯である。85は黒色土器A類椀である。回転台成形とみられる。86～95は黒色土器B類椀である。86～90は高台内にもジグザグ状のヘラミガキが施される。93は、外面に焼成後に付けられた斜格子状の線刻がみられる。94はジグザグ状の暗文を直交する2方向に施す。95は見込みに粗いジグザグ状の暗文を2方向に施した後、口縁部に密な圏線ミガキを施す。96～98は緑釉陶器である。96は暗灰色～橙灰色を呈する硬質の胎土に全面にオリーブ灰色の釉を掛ける。97は淡褐灰色を呈する硬質の胎土に淡黄緑色の釉を掛ける。削り出し輪高台で畳付以下は露胎である。篠窯産とみられる。98は見込みに1条の沈線がめぐる。焼成が悪く、軟質で黒色土器のような素地である。淡緑色の釉を全面に掛ける。高台内にトチンの痕跡がみられる。99は灰釉陶器皿、100～103は灰釉陶器椀である。99・100は三日月高台から緩やかに立ち上がり、口縁端部は外反する。見込みに灰釉が刷毛塗りされ、直接重ね焼きの痕跡が残る。深椀の102は口縁部のみ灰釉を漬け掛けにしているが、103は見込みに厚い釉が掛かる。104・105は越州窯系青磁椀である。104は粗製で、やや上げ底状の平高台からわずかに丸みを持って立ち上がり、口縁端部は外反する。口縁端に刻みを入れ、輪花とする。露胎部は紫灰色を呈する。内面に目跡が残



第30図 流路S D36出土遺物実測図(3)(S=1/4)



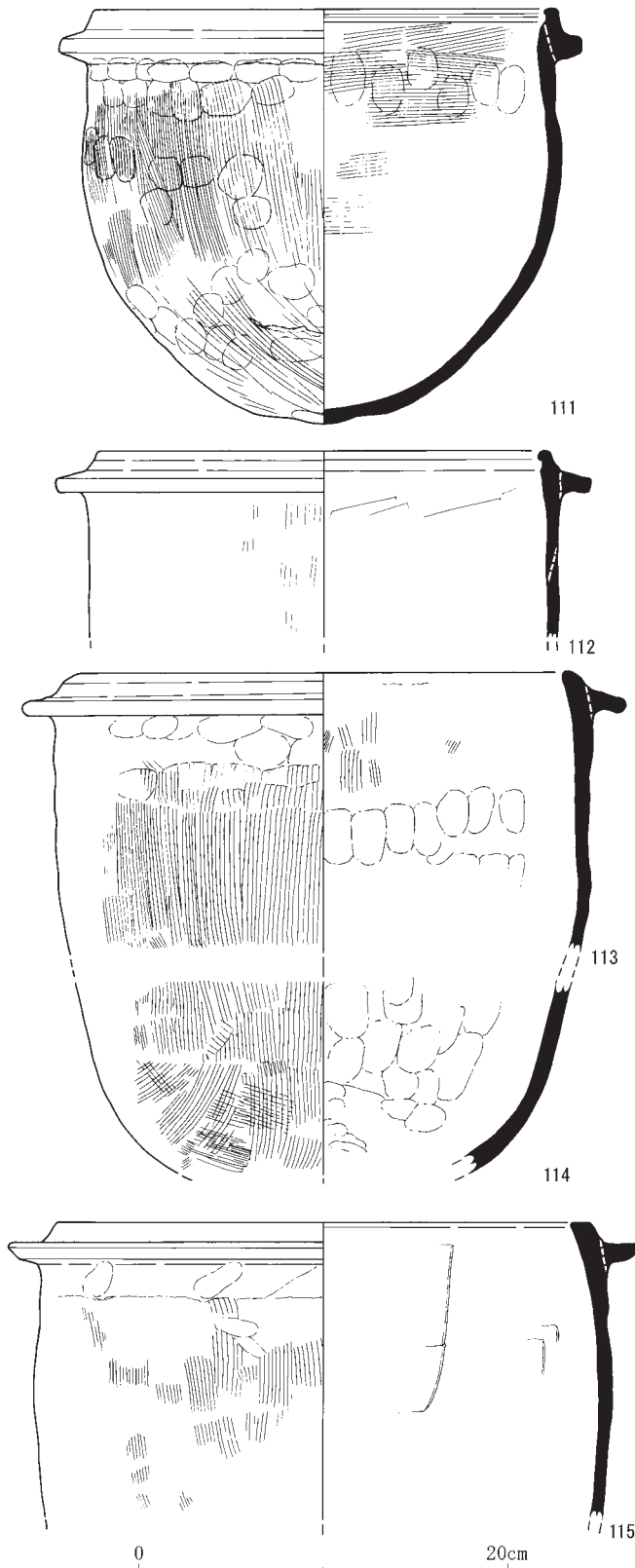
第31図 落ち込み S X37出土遺物実測図(1) (S=1/4)

る。105は精製で、畳付以外の全面に施釉する。体部をヘラで押して輪花としている。106は篠窯産の須恵器鉢である。107～109は土師器甕、110は黒色土器甕である。111～118は寸胴の土師器

羽釜である。胴部外面に縦方向の粗いハケ調整を施す。119は「く」字形に外反する口縁部と長い鏝を持つ羽釜である。暗茶褐色の胎土で河内産とみられる。120～125、128～133は須恵器壺・甕、126は灰釉陶器壺である。124・125、129・130、132・133は接合しないが同一個体である。127は土錘である。色調は淡橙灰色を呈する。134は灰釉陶器平瓶である。灰白色の胎土で、体部外面にていねいな回転ヘラケズリを施し、肩部以上に厚い灰釉を掛ける。天井部には多数の火膨れがみられる。把手はヘラでていねいに面取りしている。破片の一部がS X37から出土していることからS X37出土遺物に含めたが、大半はS D36から出土している。

溝 S D16 (第36図) 135は土師器皿である。136は無釉陶器椀、137は緑釉陶器椀である。137は硬質で暗青灰色を呈する胎土に淡黄緑色の釉を掛ける。篠窯産である。138は土錘である。色調はにぶい橙色であるが、一部は灰黒色を呈する。

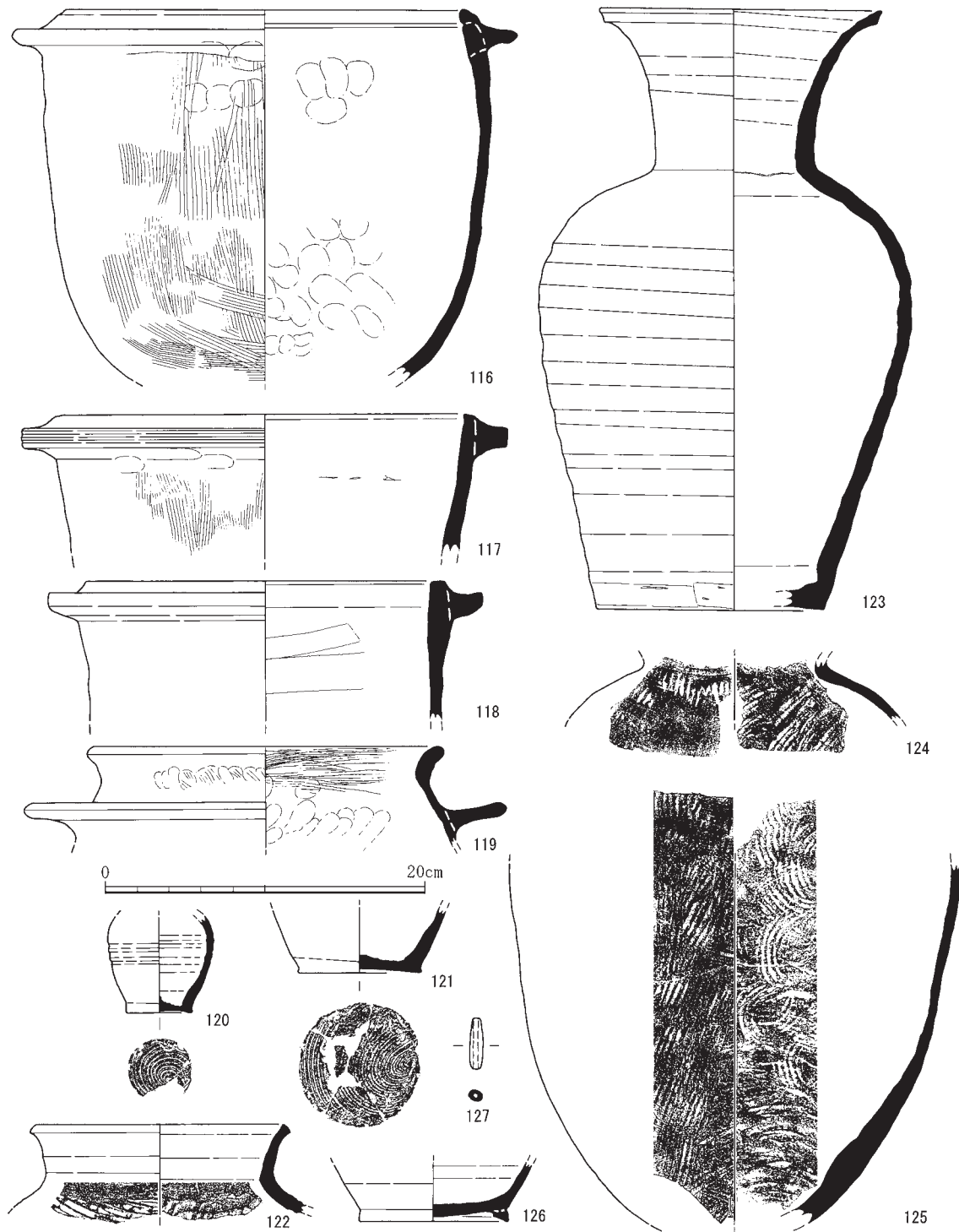
溝 S D50 (第36図) 139～143は土師器皿である。139・140は「て」字状口縁の土師器小皿である。144・145は近江産の緑釉陶器椀である。144は大きく内湾して立ち上がり、外反する口縁部を輪花に作る。内外面とも回転ナデ調整を施し、濃緑色の釉を外全体に掛ける。貼付段高台の畳付から高台内も一部に緑釉が掛かる。145は硬質で淡青



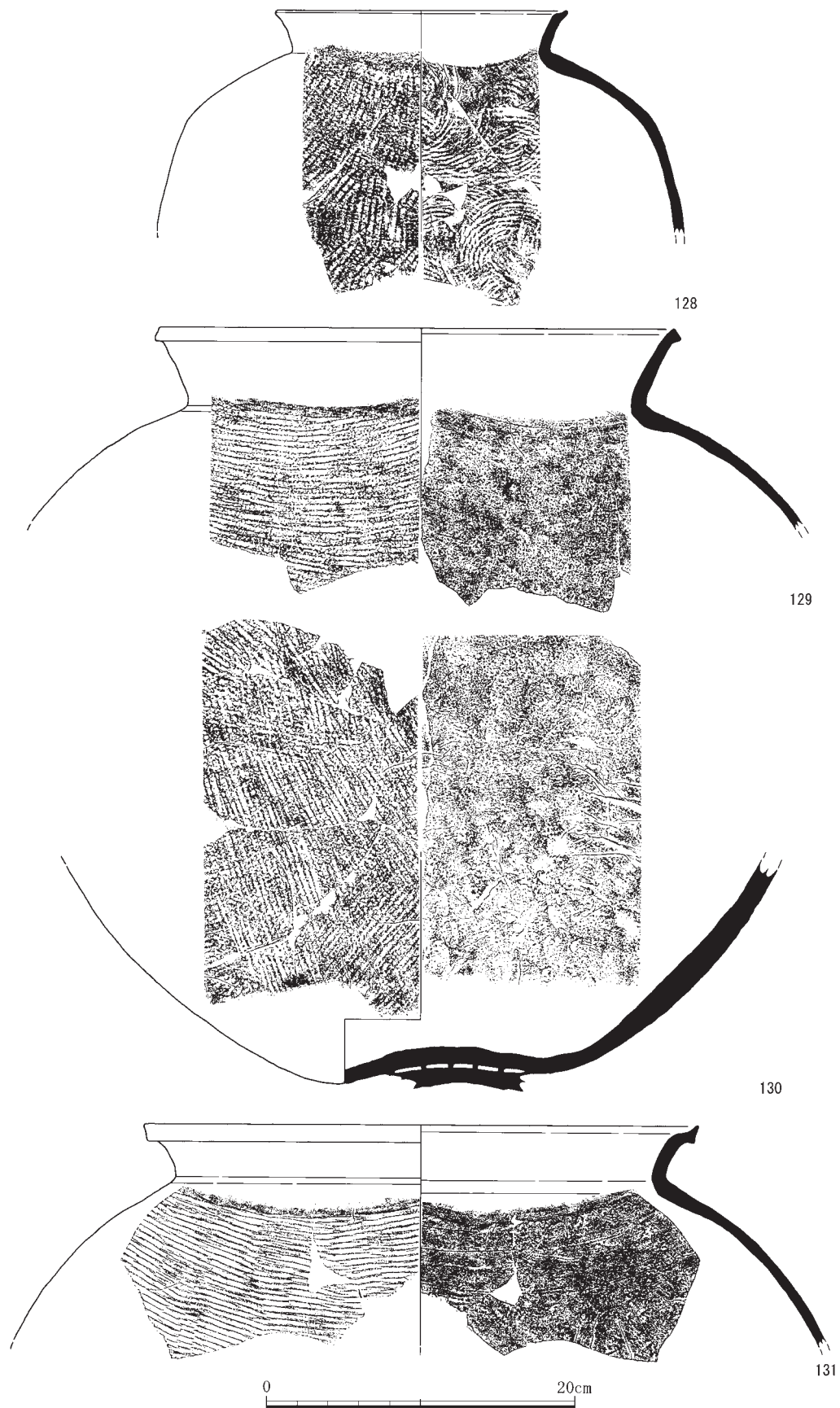
第32図 落ち込み S X37出土遺物実測図(2) (S=1/4)

灰色を呈する胎土に灰オリーブ色の釉を全面に掛ける。底部外面には回転糸切り痕がみられ、見込みには1条の圈線をめぐらせる。146・147は黒色土器B類椀である。見込みにはジグザグ状の暗文を施すが、147は2方向に重ねて施している。148は土師器甕である。体部外面は指押さえて調整するが、粘土接合痕が残る。体部内面は工具によるナデでていねいに仕上げている。口縁部はヨコナデ調整を施すが、内面には横方向のハケ目が残る。

溝SD30(第36図) 149は楠葉型瓦器椀である。内面は粗い圈線ミガキの後、見込みに螺旋状



第33図 落ち込みS X37出土遺物実測図(3)(S=1/4)



第34図 落ち込みS X37出土遺物実測図(4) (S=1/4)

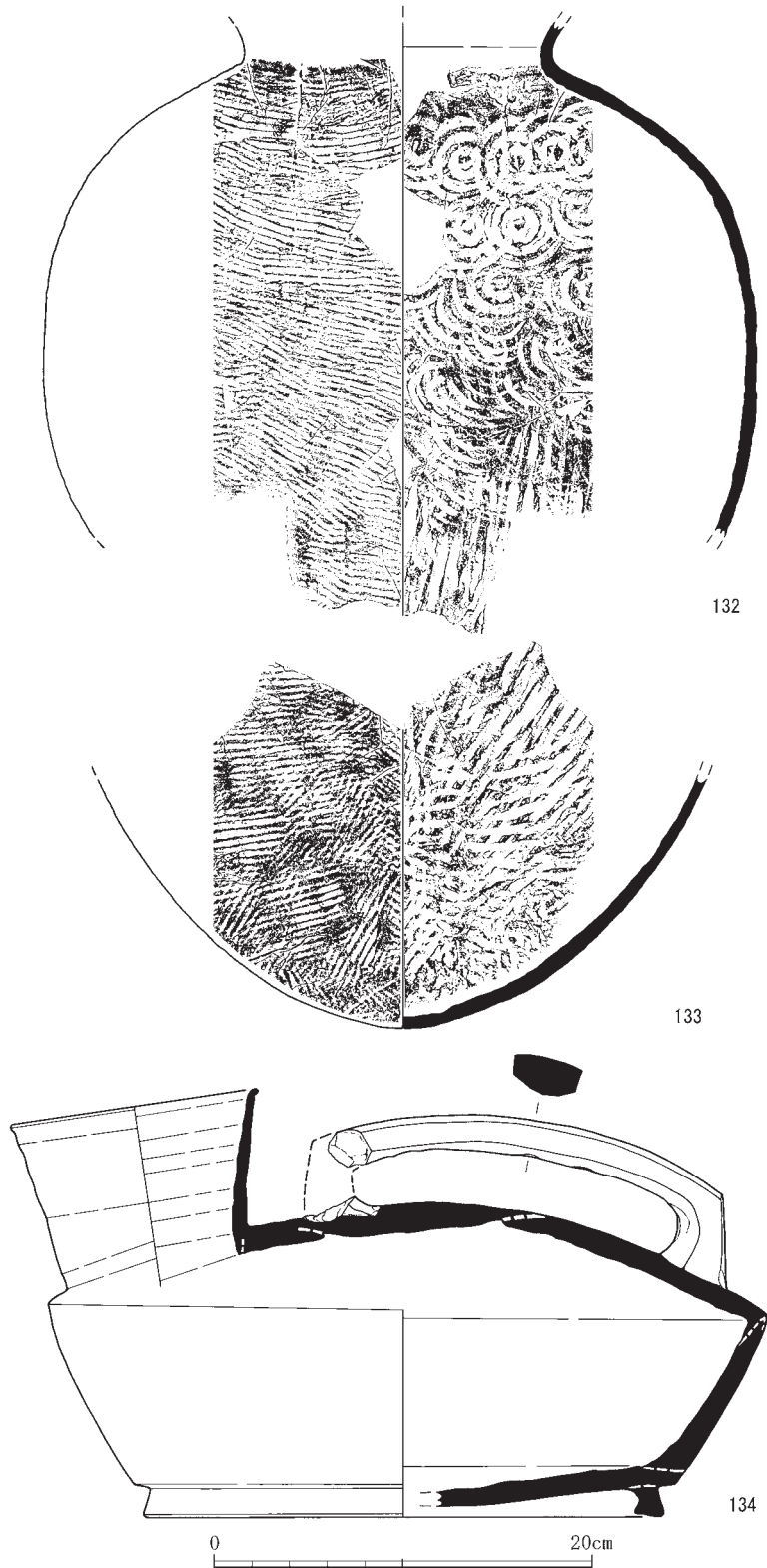
暗文を施す。外面はヘラミガキを施さない。150は土師器羽釜である。

包含層(第36図) c2-1地区の第1遺構面から第2遺構面への掘下げ中に出土した遺物である。151は楠葉型瓦器椀である。内外面に密なヘラミガキを施す。152は竜泉窯系青磁椀である。

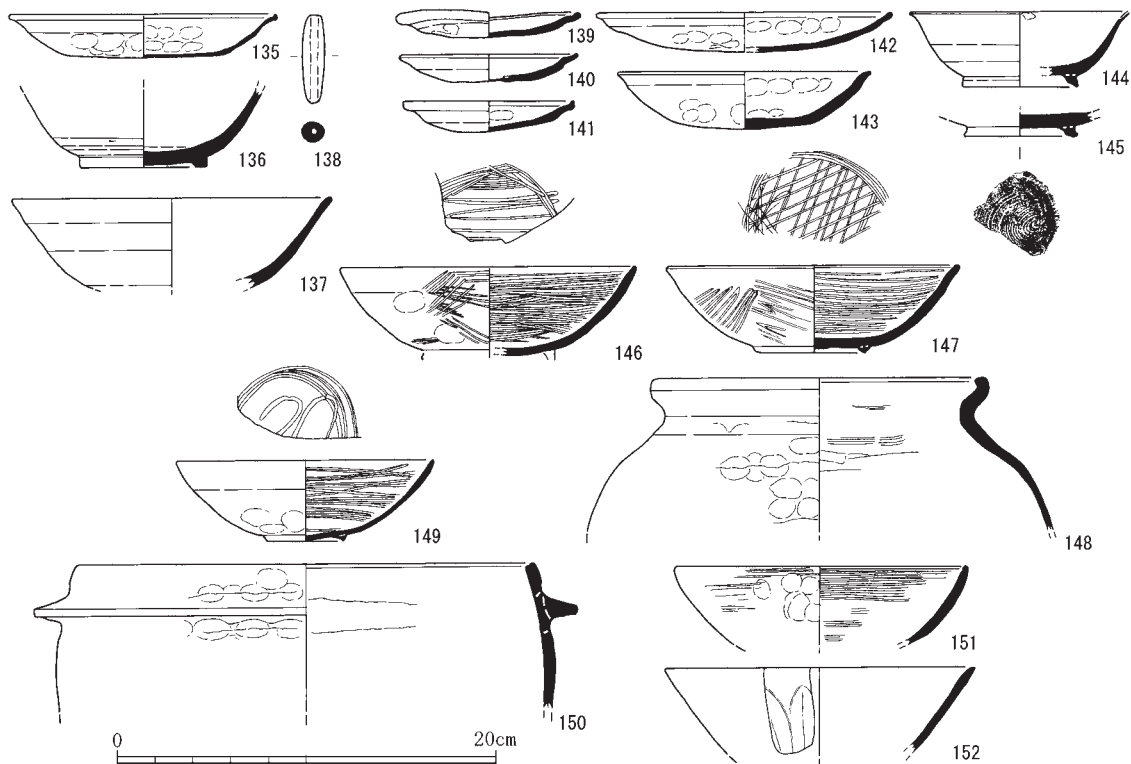
金属製品(第37図) 153・154は鉄製品である。153は頭部を短く折り曲げている。先端は丸く納めている。クサビかと思われる。S X37から出土した。154はヤリガンナと思われる。S D36から出土した。155は煙管の吸口である。筒内に羅字が残っている。全面に緑青が吹いている。第1遺構面より上層から出土した。156は耳環である。全体に剥離し、緑青が吹いている。S X37から出土した。

銭貨(第38図) 157は承和昌寶(835年初鑄)である。重さ1.2gを測る。S D36から出土した。158は天禧通寶(1017年初鑄)、159は皇宋通寶(1038年初鑄)、160は熙寧元寶(1068年初鑄)、161は元祐通寶(1085年初鑄)である。

158はc2-1地区第2遺構面の精査中に、159はS K28から、160はS K23から、161はS D20から出土した。162~165は寛永通寶である。162は古寛永、他は新寛永である。162・163はc3-1地区の遺構面直上層から、164・165はc2-1地区第1遺構面より上層から出



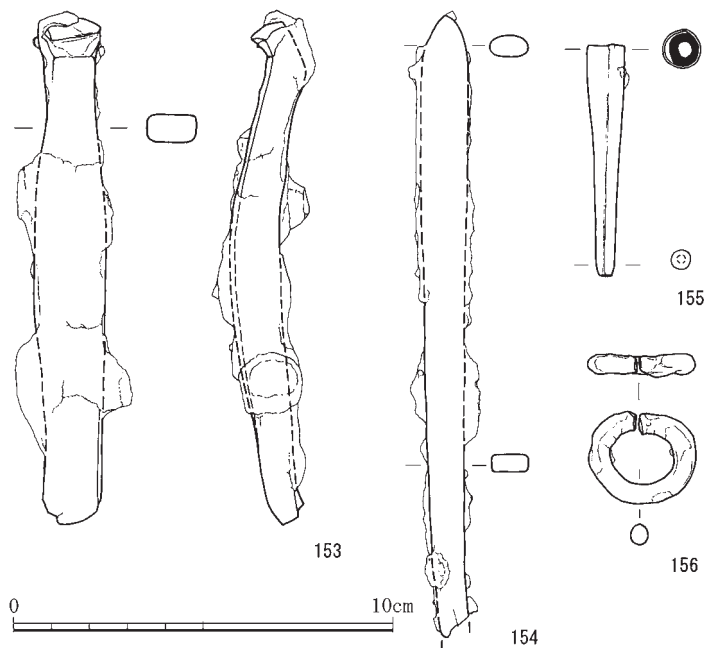
第35図 落ち込みS X37出土遺物実測図(5)(S=1/4)



第36図 溝 S D 16・30・50・55、包含層出土遺物実測図(S=1/4)

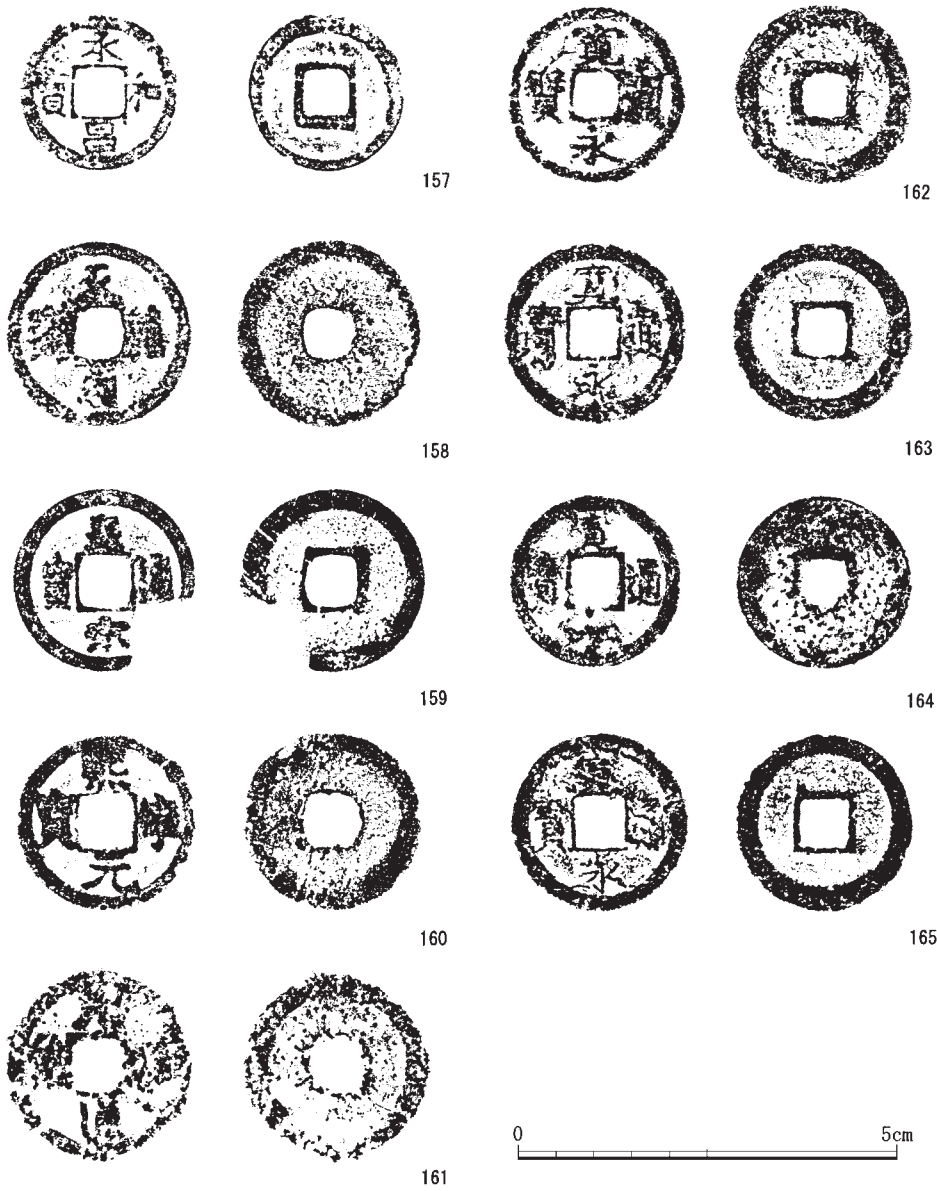
土した。

石製品(第39図) 166は基壇の部材と考えられる凝灰岩片である。3面に加工痕が認められるが、最も広く残っている面にノミによるていねいなケズリが施される。S D 36から出土した。S D 36からは他にも凝灰岩の小破片が多数出土している。167は大型蛤刃石斧である。c2-1地区の表土掘削中に出土した。

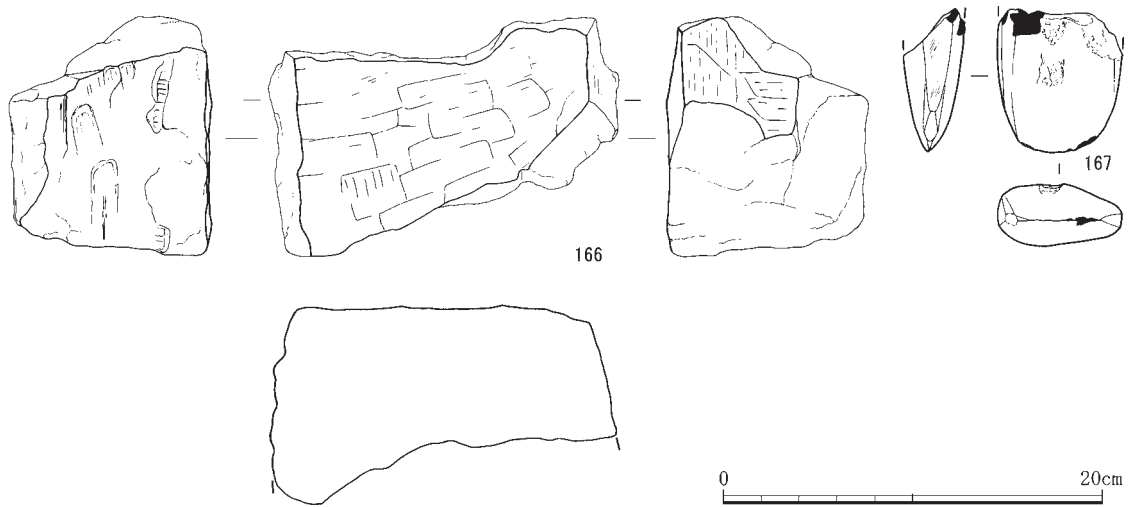


第37図 金属製品実測図(S=1/2)

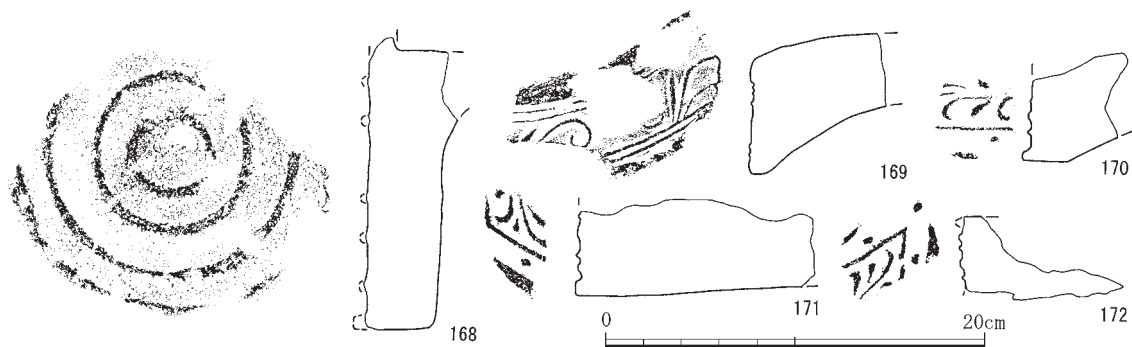
瓦(第40図) 168は三重圏文軒丸瓦である。外縁、圏線文ともに、ほとんど欠失している。瓦当は厚い。169~172は唐草文軒平瓦である。169は曲線顎で、瓦当面の外区は二重圏線がめぐる。凹面側が被熱により赤変している。平城宮6663E型と同型である。170は下内縁に珠文がめぐる。凹面は欠損しているが、凹面に近い側が赤変している。171は瓦当左下端部寄りの破片である。下内縁に珠文がめぐる。側面・凸面にヘラケズリを施す。172は瓦



第38図 錢貨実測図(S=1/1)



第39図 石製品実測図(S=1/4)



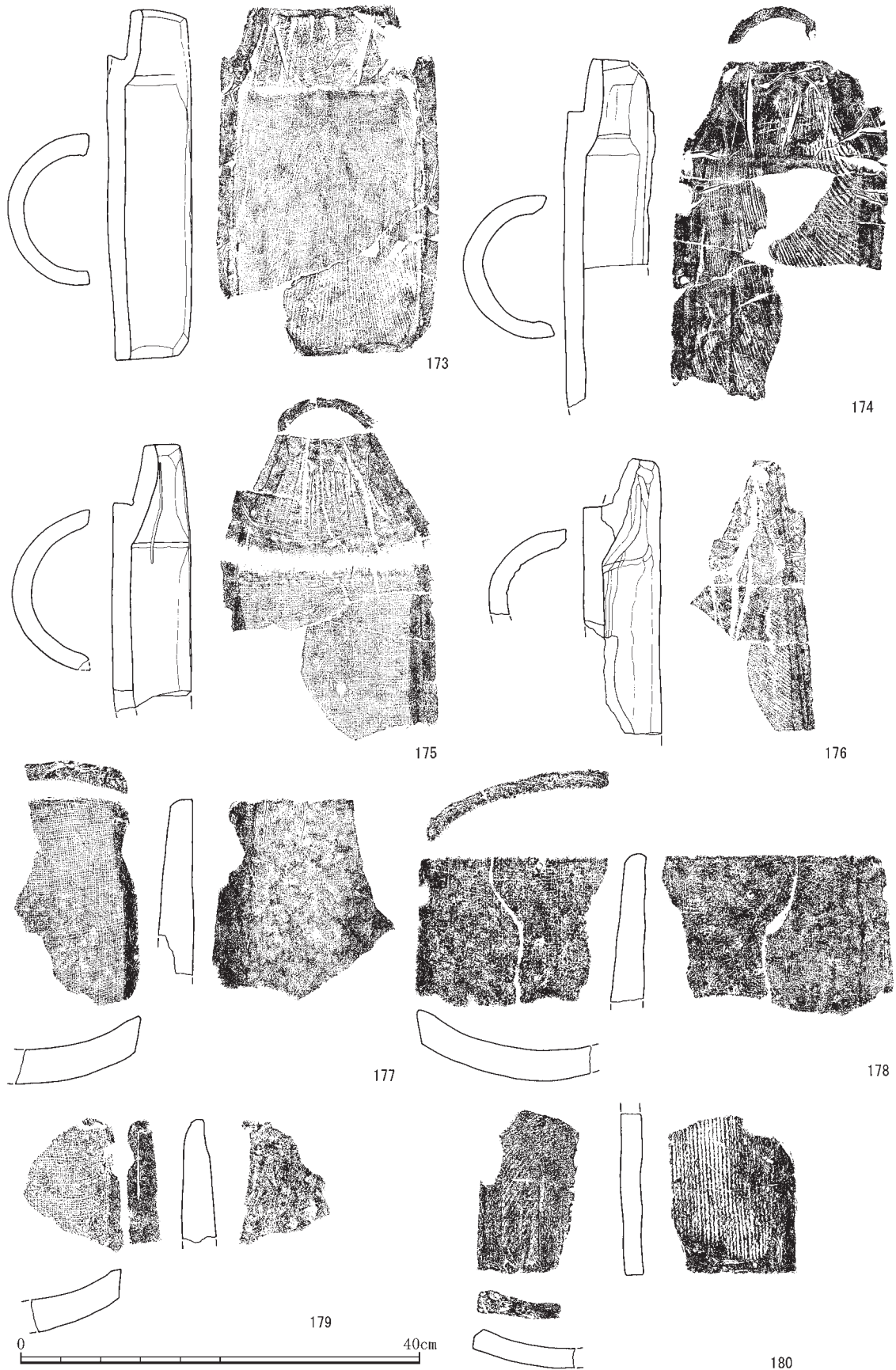
第40図 軒瓦実測図(S=1/4)

当右上端部の破片。脇内縁に珠文がめぐる。側面・凸面にヘラケズリを施す。173～176は丸瓦である。173は外面は縦方向の板ナデ、内面はコビキ痕と布目痕が残るが、筒部端側ほど、コビキが良く残る。凹面側縁の面取りの幅が小さい。凹面筒部端縁を面取りする。段部の粘土貼り足しは小さい。凸面玉縁寄りには横方向のナデ調整。筒部端面寄りには調整が弱く、コビキ痕跡が残る。174～176は凹面側縁と玉縁部側縁に比較的幅の広い面取りを施し、段部は粘土貼り足しにより成形している。いずれも凸面が被熱により赤変し、炭化物が付着するものもある。174は凹面のほぼ全面にコビキ痕跡が残る。175はほぼ全面に残る布目痕跡の下にコビキ痕跡がかろうじて認められる。177～180は平瓦である。177～179は凹面から狭端面まで一連の布目痕跡残り、凹面の側縁部から側面にかけてヘラケズリを施す。凸面は縦方向に幅の広いヘラケズリを施すが、狭端面に近いほど、ケズリが粗く布目痕跡が残る。暗灰色を呈し、焼成はやや甘い。180は凹面にコビキ痕、布目痕がみられ、側縁から側面にかけてはナデ調整を施す。凸面は縄タタキの後、広端部付近に横方向のヘラケズリを施す。灰黒色を呈し、焼成は良好である。他に比べて薄い。169はS D 15から、173・174はS X 37から、その他はS D 36から出土した。

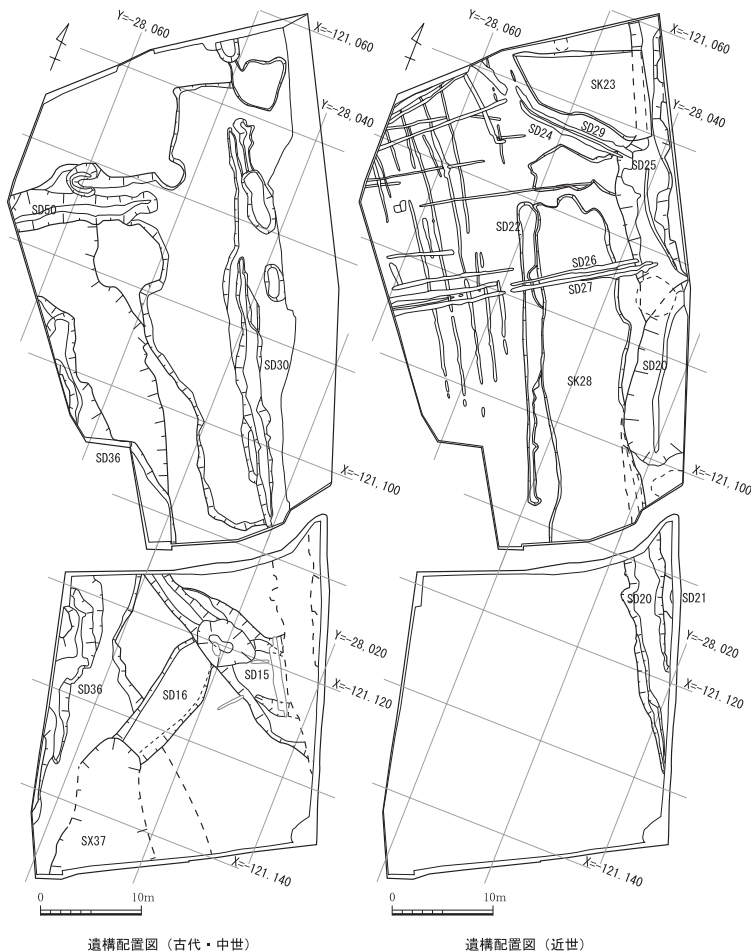
4. まとめ

長岡京跡右京第968次調査では、古代・中世の遺構と近世の遺構を検出した。その変遷は第42図に示すとおりである。

古代においては、平安時代前期～中期にかけてのS D 36を調査地西端に沿うように検出した。S D 36は強い流水による洗掘によって、攻撃斜面にあたる西肩は急傾斜面を形成し、一部ではほぼ垂直に切り立つ崖面を成している。しかしながら、S D 36上層の砂質土や粘質土が優越する堆積状況や出土遺物が比較的良く接合することなどから、S D 36が常に速い流れを保っていたと考えることはできない。S D 36の上層は徐々に堆積が進み10世紀中葉頃までには埋没するが、その過程で調査区南端部付近には多量の遺物が投棄された。その後、流れによる洗掘で抉られた落ち込みS X 37が形成され、ここにも西側から多量の遺物が投棄された。遺物が多量に出土する場所はS D 36とS X 37で変わりはなく、投棄場所がほぼ決まっていたことが窺われる。この頃、埋没したS D 36の上面に小規模な建物が建てられた可能性がある。S X 37と同様に洗掘によって形成



第41図 丸瓦・平瓦実測図(S=1/6)



第42図 遺構変遷図(S=1/750)

恵器壺・甕類には大型品が多く、なかでも、灰釉平瓶は最大径38cmを測る巨大なもので、類例を知らない。猿投窯に特注した製品とみて良いであろう。これらの遺物構成から、調査地の西側に広がる段丘上に壇上積基壇を備えた未知の古代寺院が存在した可能性を考慮する必要があるだろう。長岡京期の遺物は少なく、9世紀中頃からの遺物を主体とすることから、平安時代前期には存在したことがわかるが、その創建時期は、軒瓦などからみて長岡京期に遡る可能性も考えられる。廃絶時期はS X37に多量の遺物が一括投棄される時期を最後に遺物がほとんどなくなることから、11世紀中頃とみることができる。

(森島康雄)

- 注1 「京都第二外環状道路関係遺跡平成16年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第118冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2006
- 注2 「京都第二外環状道路関係遺跡平成17年度発掘調査報告」(『京都府遺跡調査概報』第124冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2007
- 注3 「京都第二外環状道路関係遺跡平成19年度発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第131冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2009
- 注4 注3に同じ。
- 注5 「大山崎大枝線道路改良事業関係遺跡発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第133冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2009
- 注6 「平成20年度発掘調査略報 12. 長岡京跡右京第946次」(『京都府埋蔵文化財情報』第108号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2009

された溝と考えられるSD16・15・50もSX37と同様に11世紀前半には埋没し、流路となる部分は東側に後退して、鎌倉時代にはSD30が形成される。これもSD36と同様に西側が急な傾斜面もしくはオーバーハングを成しており、洗掘によって形成されたと考えられる。近世になると流路はさらに西側になり、SD25・20などが調査区東端に形成される。この頃には流路の西側は耕作地となったようである。

ところで、SD36・SX37から多量の緑釉陶器・灰釉陶器のほか、瓦・凝灰岩片・越州窯系青磁碗・銭貨(承和昌寶)などが出土したことは特筆される。須

圖 版



(1) 調査前状況(北から)



(2) c2-1地区第1 遺構面全景
(上が北東)



(3) c2-1地区第1 遺構面全景
(南東から)



(1) c2-1地区第 1 遺構面 S D 20
全景(南東から)



(2) c2-1地区第 1 遺構面 S D 20畦
(南から)



(3) c2-1地区東壁 S D 20断面
(西から)

(1)c2-1地区第1遺構面S D25
断面(南東から)

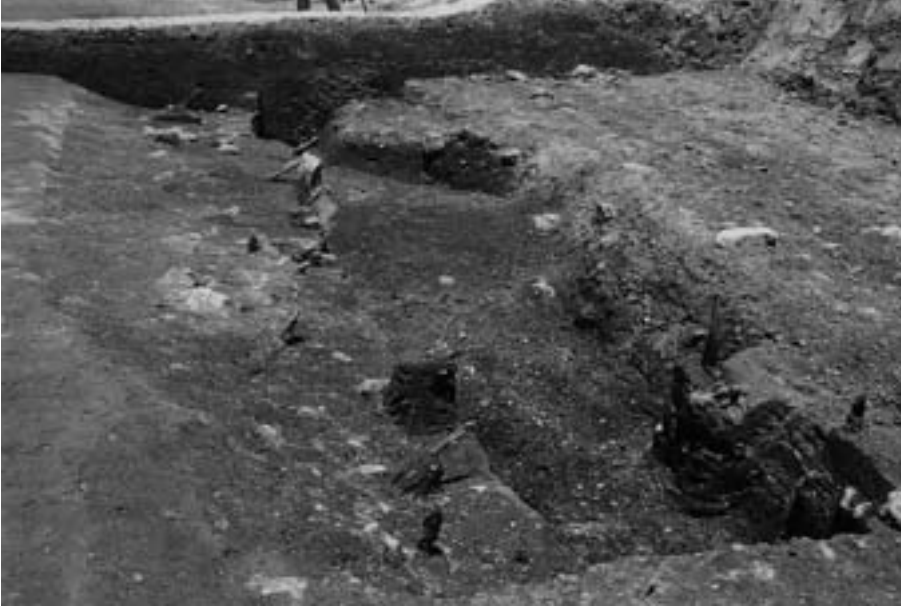


(2)c2-1地区第2遺構面全景
(南東から)



(3)c2-1地区第2遺構面S D30
全景(北から)





(1) c2-1地区第2遺構面 S D 30
護岸杭近景(南から)



(2) c2-1地区第2遺構面 S D 30
断面(北西から)



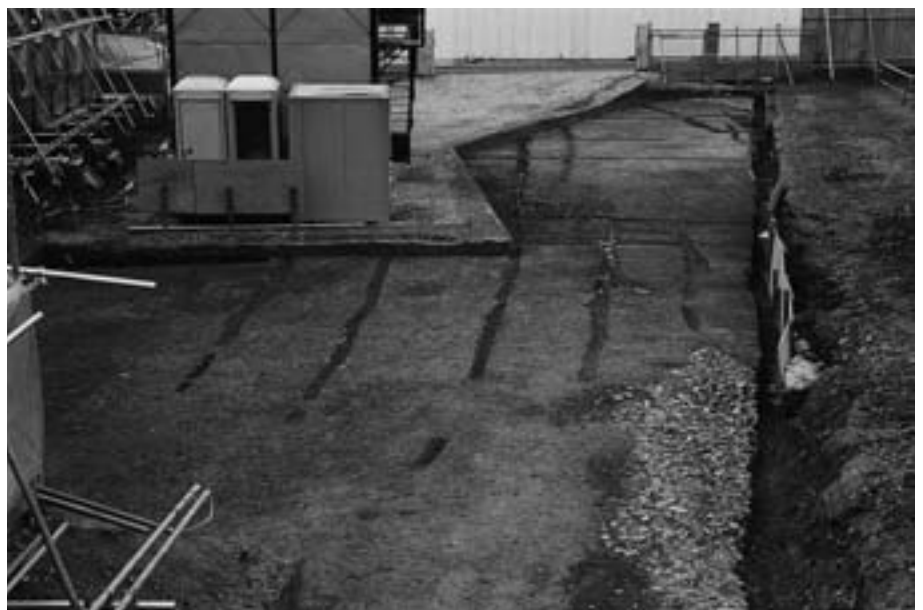
(3) c2-1地区第2遺構面 S K 34
全景(南東から)



(1)c3-2地区第1遺構面全景
(上が北東)



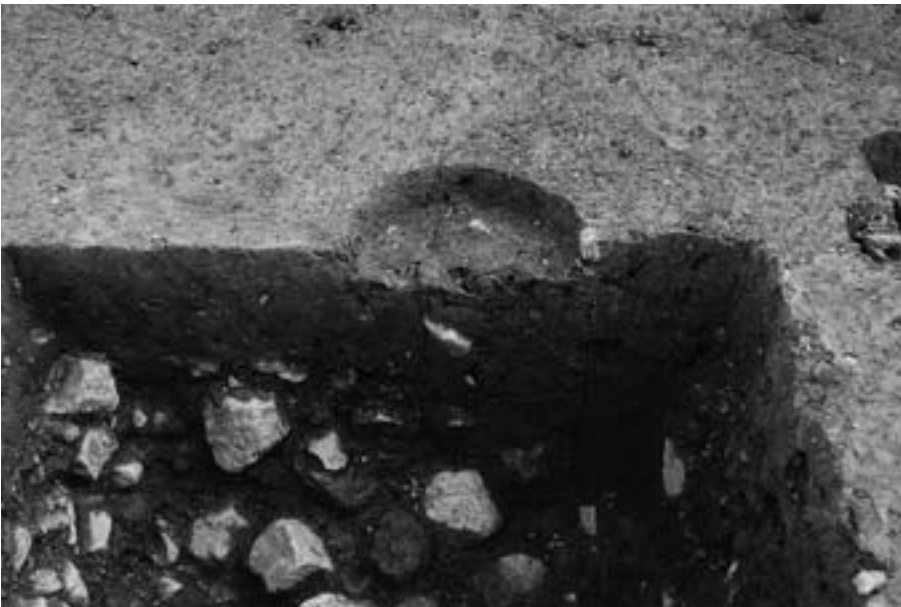
(2)c3-2地区第1遺構面全景
(南東から)



(3)c3-2地区第1遺構面北部全景
(南東から)



(1) c3-2地区南壁(北西から)



(2) c3-2地区第 1 遺構面 S P 54
断面(北西から)



(3) c3-2地区第 1 遺構面 S P 57
断面(北西から)



(1) c3-2地区第2遺構面北部全景
(南東から)



(2) c3-2地区第2遺構面南部全景
(北西から)



(3) c3-2地区第2遺構面南部全景
(南東から)



(1) c3-2地区 S D36全景(北西から)



(2) c3-2地区 S D36断面(北西から)



(3) c3-2地区 S D36断面(南東から)

(1)c3-3地区第1遺構面全景
(上が北東)



(2)c3-3地区第2遺構面全景
(南東から)



(3)c3-3地区第2遺構面 S D50
断面(北東から)





(1) c2-2地区全景(上が北東)



(2) c2-2地区全景(南東から)



(3) c2-2地区 S D 20断面(南東から)



(1)c2-2地区 S D15全景(北西から)



(2)c3-1地区全景(上が北東)



(3)c3-1地区 S D36断面(南東から)



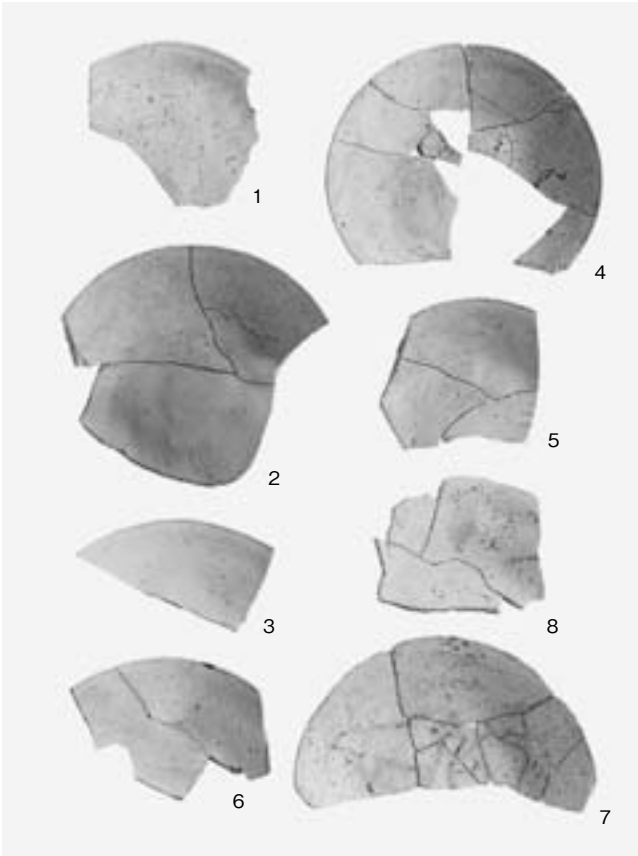
(1) c3-1地区 S D36断面(南東から)



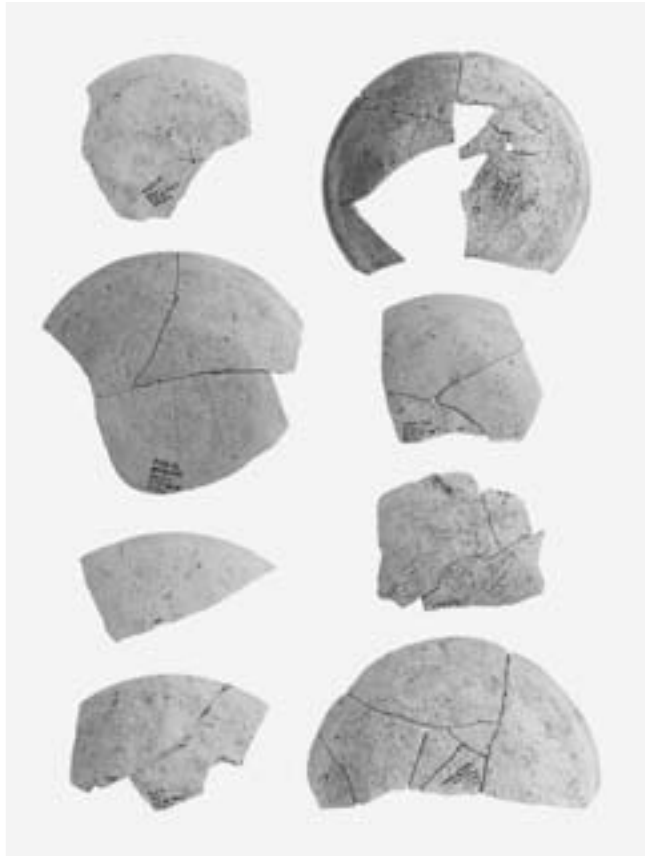
(2) c3-1地区 S X37遺物出土状況
(北から)



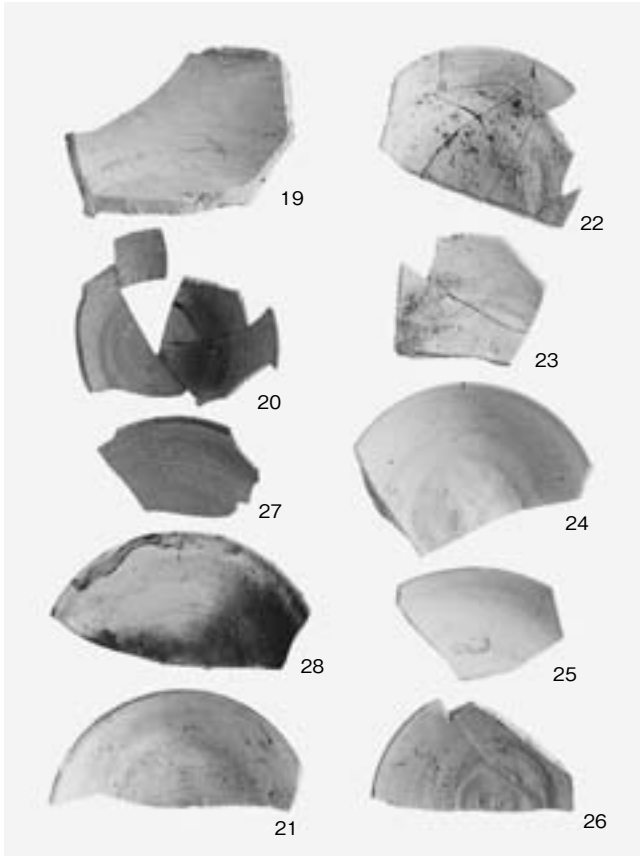
(3) c3-1地区 S X37遺物出土状況
(東から)



(1) 出土遺物 1 (S D36)



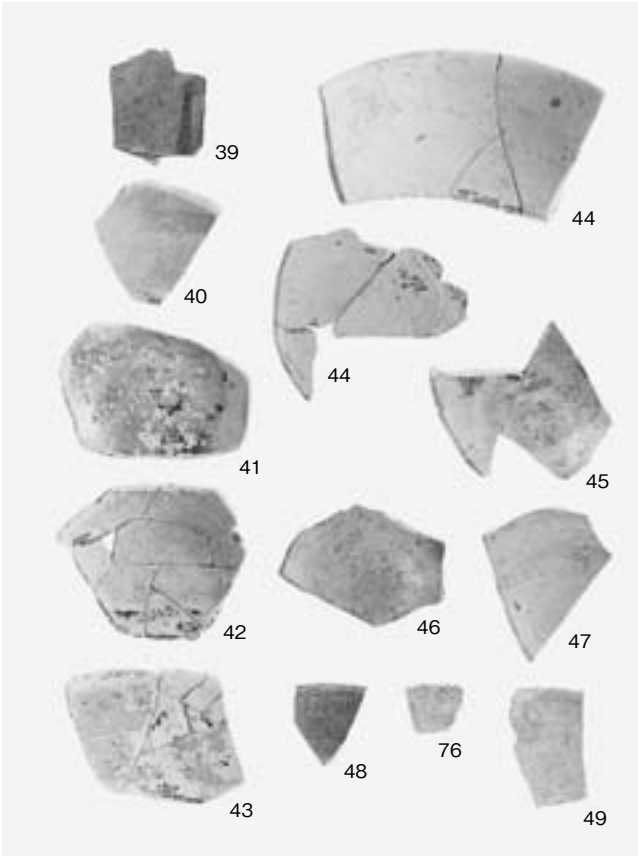
(2) 出土遺物 2 (S D36)



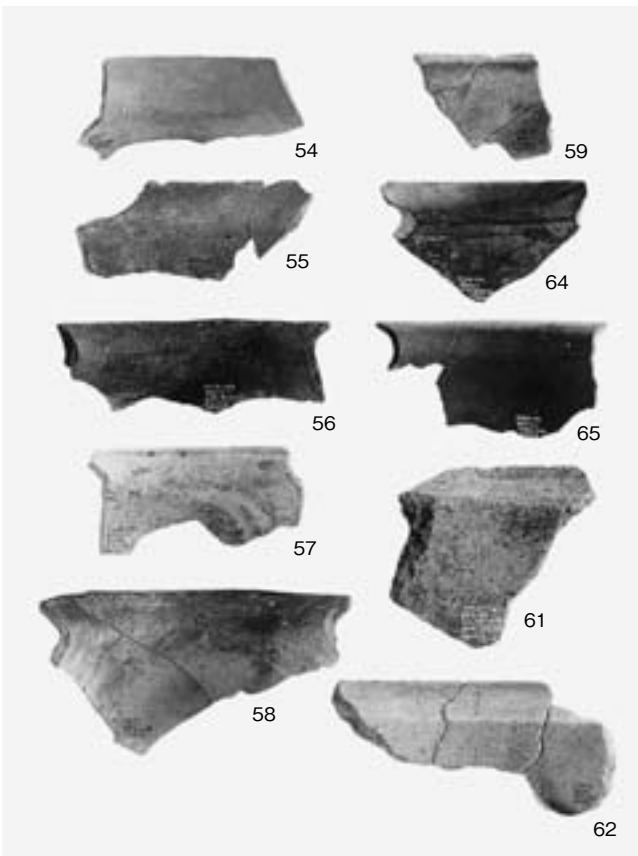
(1) 出土遺物 3 (S D36)



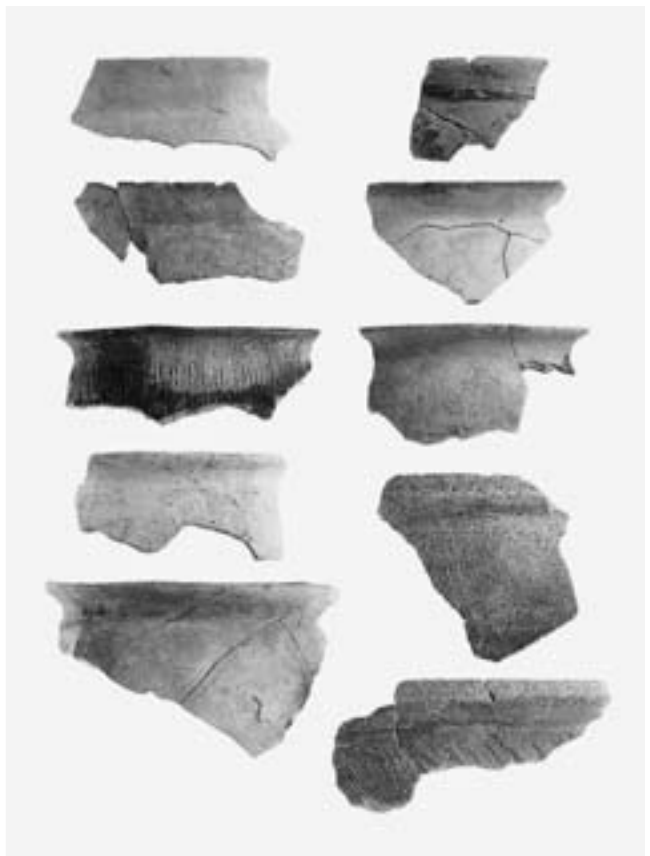
(2) 出土遺物 4 (S D36)

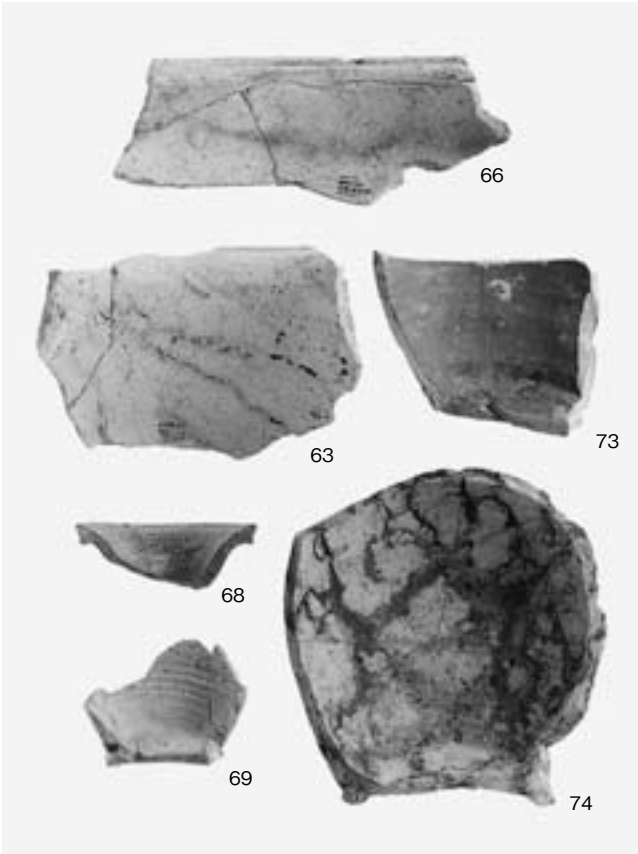


(1) 出土遺物 5 (S D36)

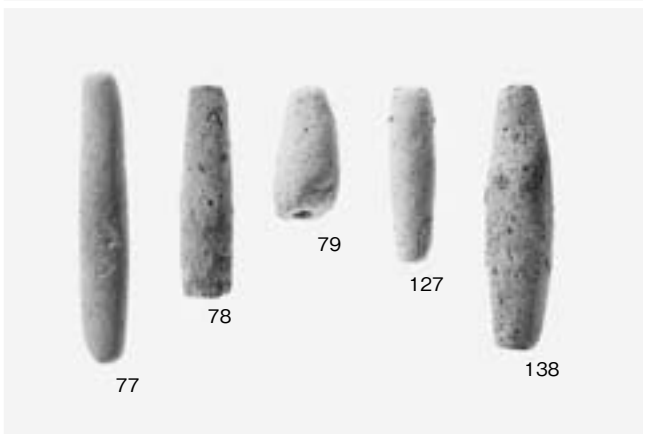
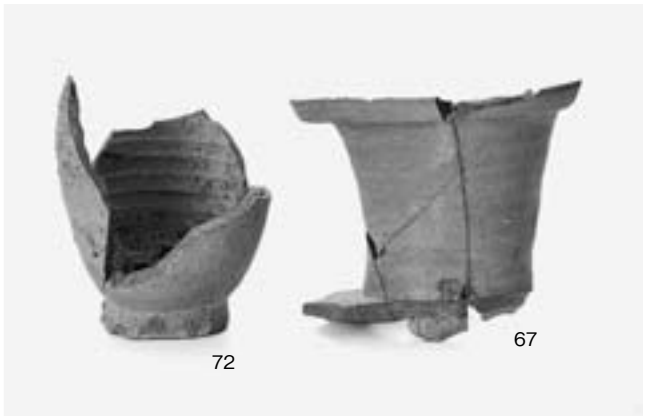


(2) 出土遺物 6 (S D36)

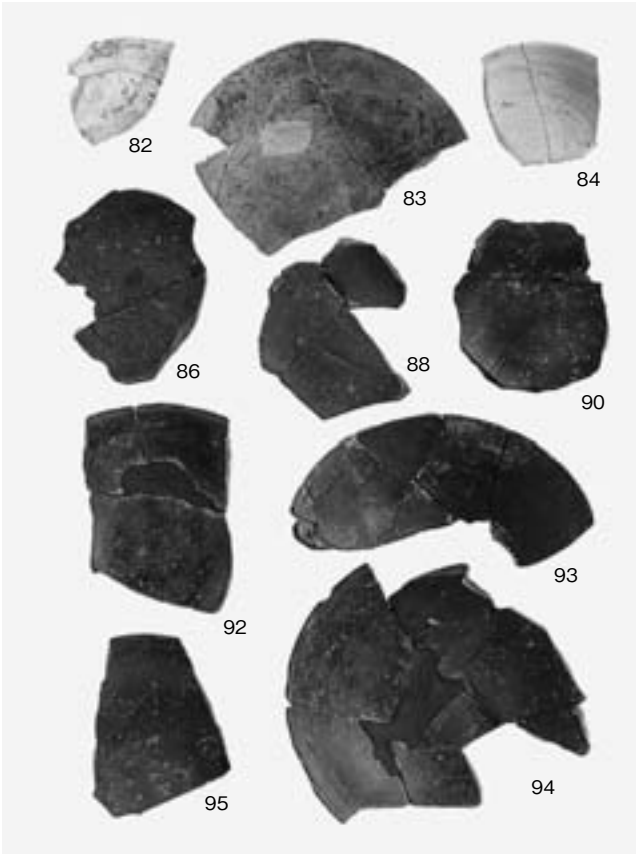




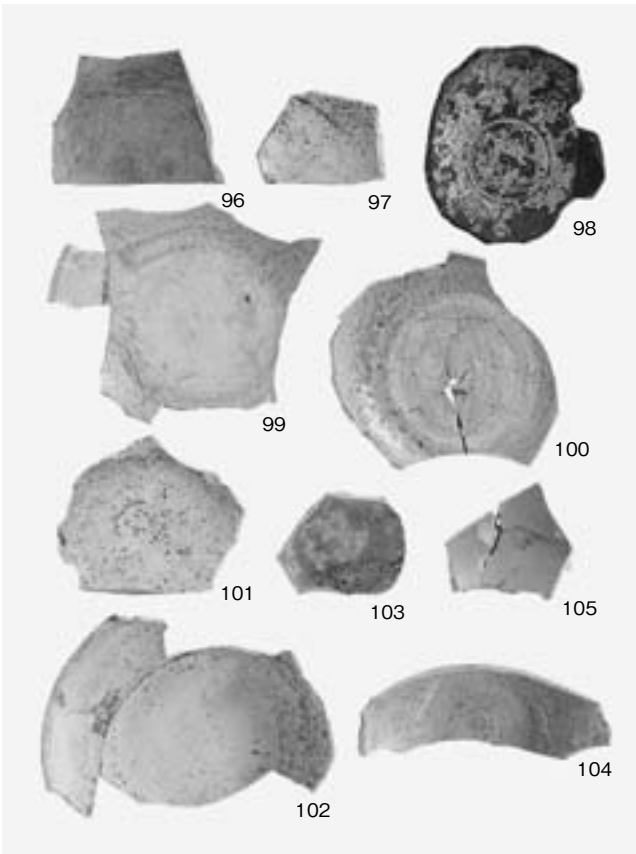
(1) 出土遺物 7 (S D 36)



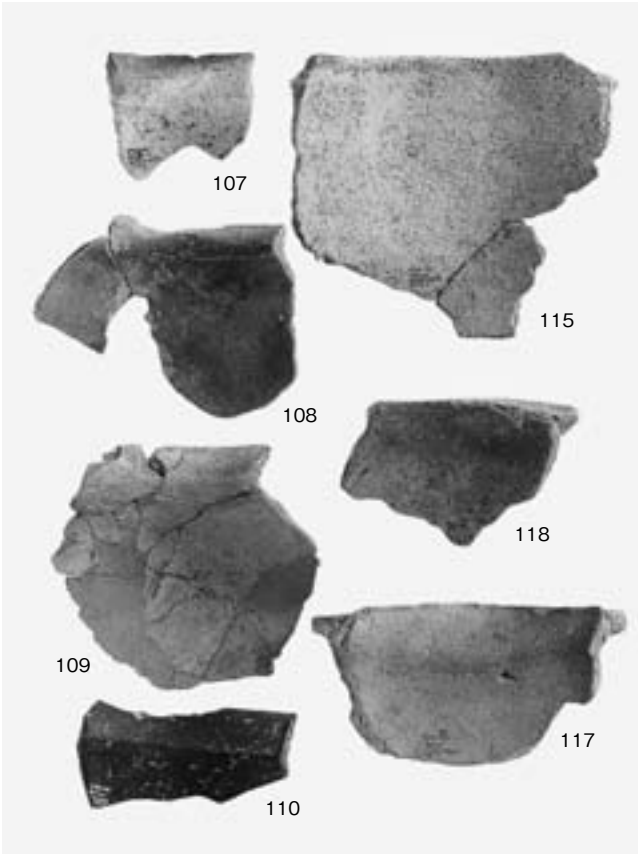
(2) 出土遺物 8 (S D 36 · S X 37 · S D 16)



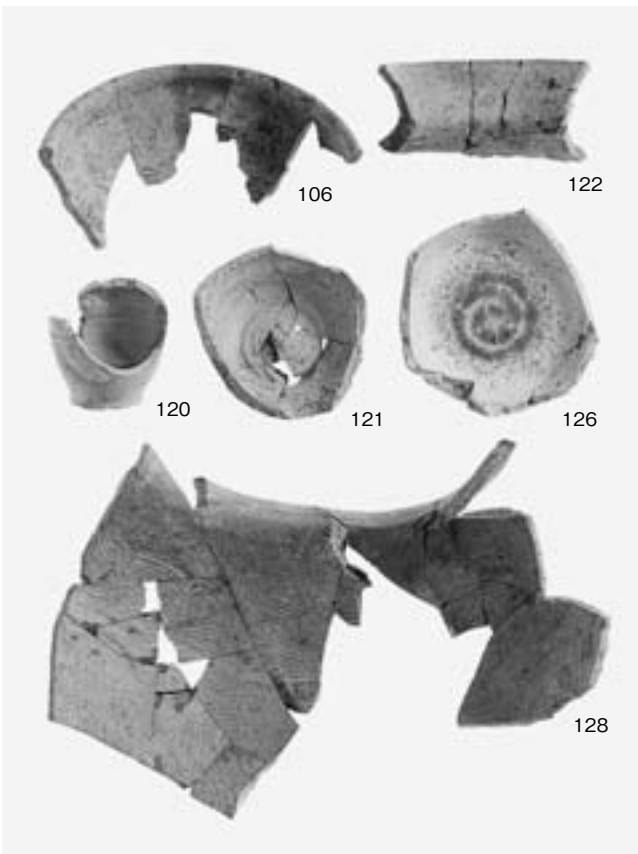
(1) 出土遺物 9 (S X 37)



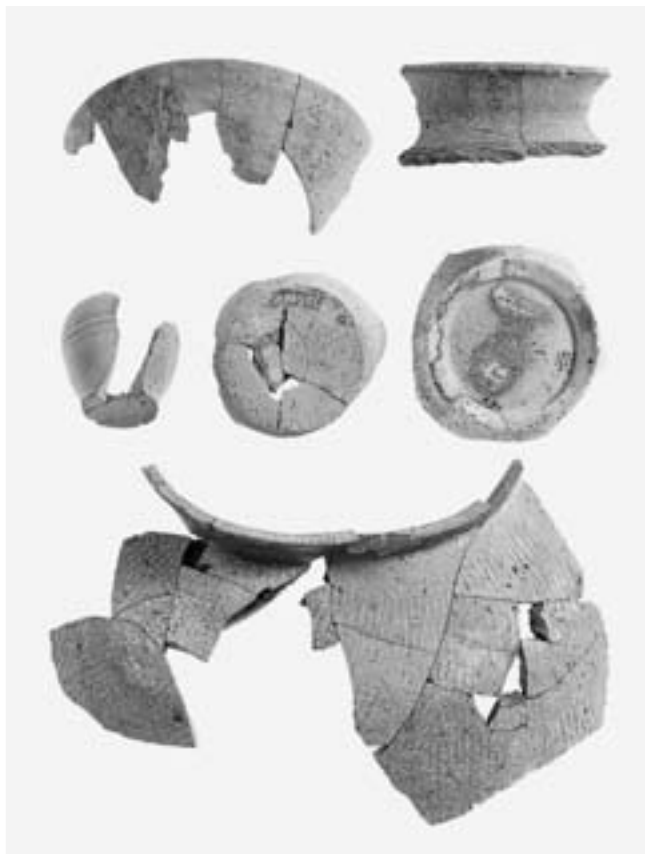
(2) 出土遺物 10 (S X 37)

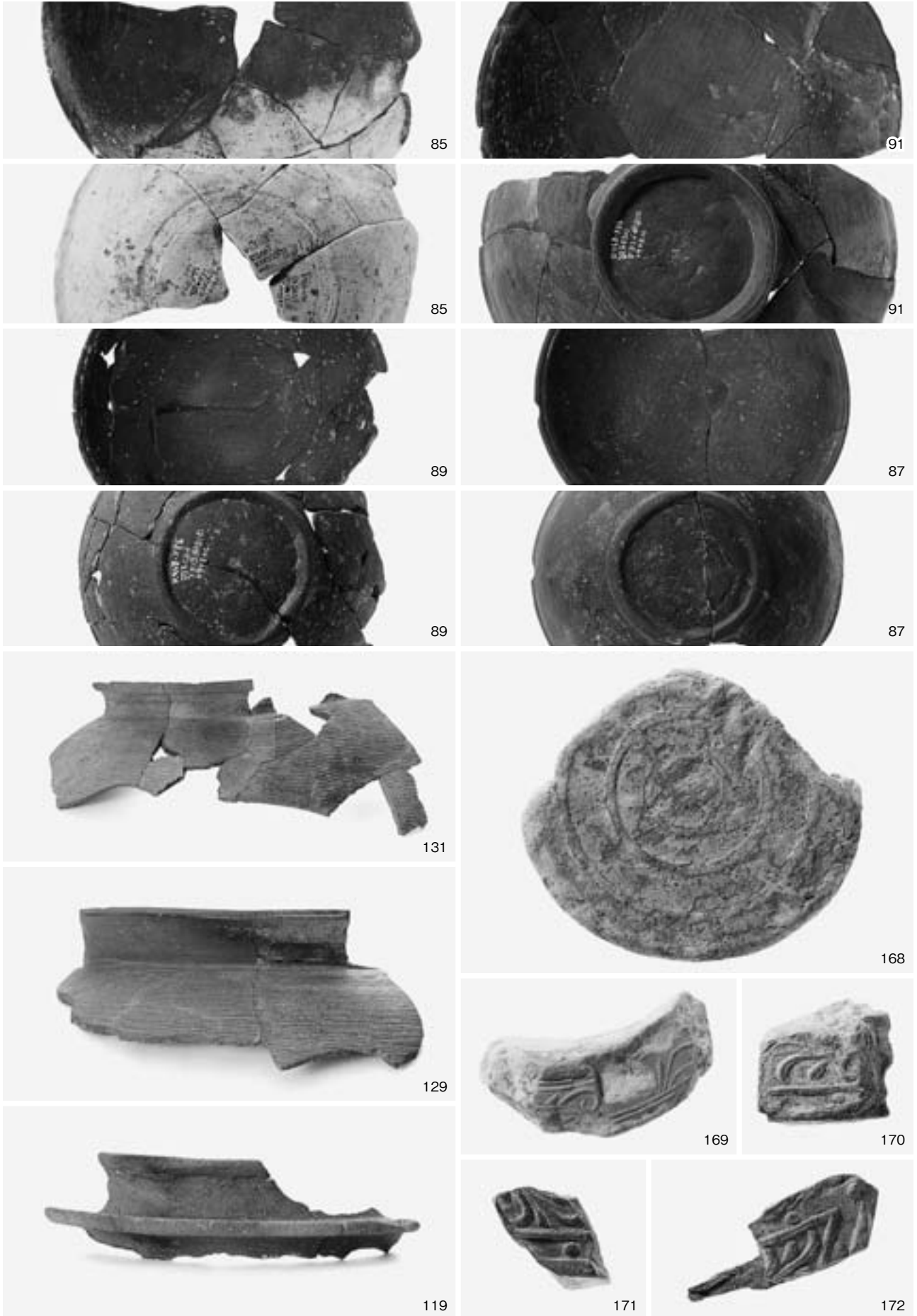


(1) 出土遺物11(S X37)

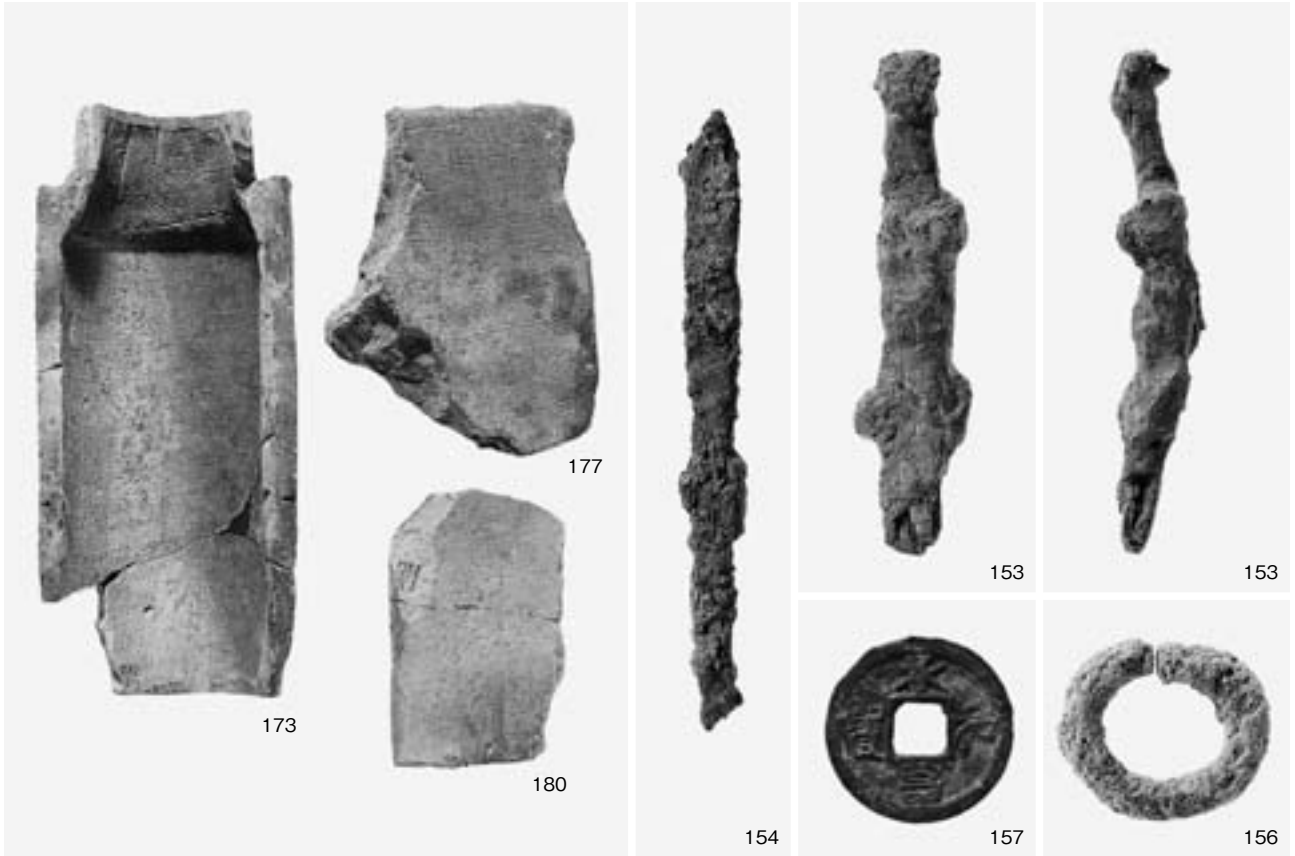


(2) 出土遺物12(S X37)





出土遺物13(S X37・S D15・S D36)



(1) 出土遺物14(S D36・S X37)



(2) 出土遺物15(S X37)

京都府遺跡調査報告集 第 141 冊

平成22年3月31日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141